戦後60周年記念平和事業

「戦争と平和」講演会

イラク市民の暮らしと平和を考える

平成17年10月15日（土）午後1時から

於：我孫子市民会館大ホール

○司会　皆様、こんにちは。本日はお忙しい中、ようこそおいでくださいました。平和事業の運営委員をさせていただいています平田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

我孫子市の平和事業ですが、8月には映写会「父と暮せば」を実施いたしました。9月には広島へ派遣しました中学生6名の方たち等を始め、各世代の市民の方たちのご参加をいただいて、熱い平和へのメッセージを交換することができました。

本日は「戦争と平和を考える」講演会の始まりでございます。どうぞごゆっくりご観覧いただきますようお願い申し上げます。

それでは、主催者側としまして、我孫子市長福嶋浩彦よりあいさつがございます。

よろしくお願いいたします。

○福嶋市長　どうも皆様こんにちは。きょうは、ようこそ「戦争と平和」の講演会においでくださいました。

我孫子市は、戦後60周年ということで、今年全部で19の平和事業を進めています。司会の方からも紹介をさせていただきましたけれども、その目的の一つは、60年前の戦争の記録をきちんと次の世代に引き継ごうということです。もうそろそろ、おじいさんおばあさんが戦争を知らない世代になってきています。次の世代に、この戦争の悲惨さや恐ろしさをきちっと伝えていくということは、もう今が最後のチャンスではないかと思っています。

それから、この平和事業のもう一つの目的は、60年前の戦争だけではなくて、今の問題もきちっと考えていこうということです。今回のこの講演会も、その二つ目の目的の方に沿った事業ということになります。世界でたくさんの紛争地域があります。そういうところで、私たちと同じ市民がどんな状況に置かれているのか。そのことをきちっとまず知るところから、私たちの平和への取り組みを始めていこうではないかということです。

市の講演会といいますと、多くは大学の先生など、それなりの方を呼んできて無難に終わらせるというのが多いのですけれども、今回この講演会では、講師の皆さんを、市としては思い切って選定させていただきました。市民の皆さんからはいろいろな意見も寄せられています。一つは、市がこういう平和事業をそもそもやる必要があるのか、市の仕事ではないのではないかというご意見もありました。もちろん市は外交政策とか防衛の問題は自分の仕事ではありませんし、市の権限の及ぶところでもありません。ただ、平和の問題というのは、皆が取り組んでいかなければいけないことだろうと思います。特に自治体同士、自治体外交という言葉もあるくらいですけれども、自治体同士あるいは市民同士が世界で交流をしていく、市民レベルでの国際交流を進めていくというのも、世界の平和をつくり出していく上で大切なことだと思います。そういった分野では、自治体の役割も大きいのではないかと思います。

今回はイラクの、先ほど申し上げたような市民の状況を、ちょっと先入観ですとか、イ

デオロギーは横に置いておいて、まず私たち一人一人が自分の耳で聞き、自分の目で見るというところから始めようと考えました。そういうことで、イラクの状況を一番よく知っておられる方であり、同時にそれぞれ違った立場の方、違う視点を持った方を3人お呼びしました。

フォトジャーナリストでイラクをずっと取材をされ、また武装勢力に拘束されるという大変な経験をされた郡山さん。

そして、自衛隊を率いて現地の復興のために努力をされました松村様。

そして、テレビで流れる映像というのは、アメリカの攻撃機が爆撃するときの爆撃する側の映像というのが随分多かったんですけれども、そうではなくて、イラク市民の側からの映像を世界に配信をしてきた、世界的な平和グループのきくちさん。

この3人の方をお呼びしました。

先ほど言ったことと重なりますけれども、この平和の問題に限らず、私たち日本人というのは、あることに賛成の人は賛成の人ばかりで集まって、賛成の講師を呼んでそうだそうだと言っているし、反対の人は反対の人ばかりで集まって、反対の講師を呼んで反対だ反対だと言っている。そういうことが多いような気がします。でも、いろいろな角度からいろいろな人の意見をまずきちっと聞く。反対するにしても、相手の意見をきちっと聞いた上で、自分の意見を述べていくということがとても大切だと思います。自分と違う立場の意見をまずきちんと聞く、最初から排除せずにちゃんと聞くというのは、むしろ平和の原点、平和をつくり出す上で一番大切な態度ではないかなとも思っています。

そういった思いを込めて、この講演会を開催しました。また、皆さんからのご質問などもいただいて、講師の先生からお答えをいただくという時間もとっておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

充実した講演会になることを期待しまして、あいさつとさせていただきます。どうもありがとうございます。（拍手）

○司会　それでは早速講演に入りたいと思いますけれども、皆様に少しお願いがございます。

今、市長の方からもお話がありましたが、入場の際に手渡しをしましたチラシの中に、こういう「戦争と平和講演会アンケート」というのと、講演者への質問用紙というのが入っております。今もお話されましたが、3人のご講演をいただいた後、30分の休憩がございます。その時間に、この講演者への質問というところに、それぞれの講演者のお名前と質問を書いていただいて、左側の非常口のところに箱がございますので、そちらにお入れいただくようにお願い申し上げます。

きょうは3人のご講演をいただいて、3時には第1部が終了します。その後30分の休憩に入りまして、その質問をこちらで集めさせていただいて、全部ではございませんけれども、

その質問を交えてのトークを進めていきたいと思います。

4時には終了というふうな流れになっておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、初めの講演をしていただく方をご紹介いたします。

郡山総一郎様、どうぞ。お願いいたします。（拍手）

フォトジャーナリストでいらっしゃいます郡山総一郎様のプロフィールを紹介させていただきます。

2001年「イスラエルの現実」と題した写真で、よみうり写真大賞奨励賞を受賞されています。

2004年4月に、皆様ご存じかと思いますが、イラク取材中に武装グループに拘束されました。9日後に解放された方でいらっしゃいます。

ではどうぞ郡山様、よろしくお願いいたします。（拍手）

○郡山　こんにちは。フォトジャーナリストをやっております郡山と申します。

本日は、このような場で話す機会と写真を見ていただける機会というものを得まして、大変感謝しております。ふだんは新聞とか雑誌とか、あと本などで写真を発表したりしているんですけれども、ほかにこうやって見ていただく機会をつくっていただいたということで、やはり僕らの仕事というのは現場に行って状況とか、どうやって人が生きているのかということを写真に撮って文章に書いて伝えて、人に見てもらって初めて一筋になる仕事でもあります。ですので、このような場で、ほかの機会を得るということで、また現場に戻った際に取材させてもらった方々に顔見せができるということもありまして、大変うれしく思っております。

本日は、イラクを含む数カ国の、アフガニスタンとかパレスチナとか、そのような場所で戦争とかそういうものがどのようにして人の生活にかかわっているのか、あと、どういう人たちが犠牲になっているのかということを、ちょっとお話させていただこうというふうに思っております。最後までどうぞよろしくお願いします。

まずは、イラクの方からお話させていただこうと思います。

2003年バクダットが陥落した直後、僕はすぐにバクダットの方に入りました。それまでなかなかビザがおりなくて、入ることができなくてやきもきしていたんですけれども、イラクという国に入りまして、それ以前もずっとイスラム圏が特に好きでして、イスラム圏ばかり取材していたんですけれども、このときに初めてイスラム圏の中のイラクという国を訪れました。

真っ先にバクダット市内を回っておりまして、一番目についたというか気づいたことというのは、無政府化。サダム・フセイン政権が倒れてしまったということもありまして、警察も軍隊も全然役に立たなくなってしまいましたので、市民たちが皆泥棒さんになって

しまったと。現地ではアリババというふうに呼ばれていたんですけれども、この写真に写っているこのターバンを巻いたおじさんの乗ってきたのがこの馬車なんですけれども、それに似合わないソファが乗っています。革張りの。これは今とってきたものですね。その横に写っているのがこれは自動車学校なんですけれども、そちらにも人影がちらちら見えておりまして、とにかくありとあらゆる建物の中に皆入って、どんどん物を持っていってしまうと。ですから、町ですれ違う子供も老人の方も必ず何か持っていて、買い物帰りならぬ泥棒帰りみたいな感じで、こんな感じですごくにぎわっておりました。銀行の前とかを通りかかりますと、お金をいっぱい袋に入れたおじさんが重そうにその袋を引きずっていて、僕の中では泥棒というのはこそこそしているものだと思うんですけれども、なぜかカメラを向けるとピースサインをするという、堂々とした泥棒さんたちばかりでした。その奇妙な光景を見ながら、政権の崩壊というものはこういうものなのかなと。行政がなくなるとこうなってしまうのかなということを感じました。

紛争取材、幾つか今までやってきているんですけれども、その中で初めて行く国とか、状況があまりつかめていない場合は、病院に行くことが多いです。その地元のですね。ここは、マンスール地区にありますセントラル総合病院という、かなりこの辺では大きな病院です。

たくさんの人が治療を受けに来ているわけなんですけれども、もう待合室にも並び切らない人たちが外にもおりました。僕らの報道の人間とかはプレスカードというものを持っておりますので、それを米兵に見せるとすんなり通してくれました。ですけれども、ぐるっと病院を囲むようにして兵士が立っておりまして、出入りするイラク人に対して銃を向けてボディーチェックをしている姿を見まして、アメリカはもともとイラク国民を解放するとか言って攻撃したんではなかったかなということを考えて、すごく矛盾を感じました。

爆撃の映像とか、先ほど市長さんもお話されておりましたけれども、テレビの映像で爆撃とかそういう映像を、皆さんごらんになったと思います。イラクもそうですし、それ以前のアフガニスタンとか、そのさらに10年前の湾岸戦争とかの映像とか、そういうものを見られた方はとても多いと思いますけれども、僕はテレビを見ていてすごくいつも違和感を感じます。爆撃の映像ではあっても、その爆弾が落とされているところに僕らと同じ人間が生活をしている、そういう場に爆弾が落とされていて、実際に人が死んでいるんだということが、どうしても、全く僕は感じられないんですね、テレビの映像からは。

爆撃というのは、もちろん直接爆弾によって亡くなる方いらっしゃいますけれども、たくさんの人が爆弾の破片ですね、破片とかが飛んでくるわけです。爆発すると。それによって亡くなったり、けがをしたりする人たちが多いのですけれども、そういうことさえもテレビの映像からは伝わってきません。

これは9歳の男の子なんですけれども、この前日に家の近くに爆弾が落ちまして、彼は

寝ていただけなんですけれども、小さな破片が右耳の下から頭に向かって入ってしまいました。ちょうど脳の真ん中付近で止まってしまって、意識が戻らなくなってしまいました。ずっと湾岸戦争以降、経済制裁をいろいろ受けていた国ということもありまして、現在もそうですけれども、医薬品とか医療器具というものは全く足りない状況にあります。しかも、場所が場所だけに摘出することもできないということで、もう医者がこれ以上何もすることがないのだと。できることがないのだというふうに言ってさじを投げておりました。それで、どのくらいこの子はもつのかと聞いたら、もってあと3日くらいだろうというようなことを言っていたので、彼はたぶん10歳の誕生日を迎えることはなかったのではないかというふうに思います。

この病室を出るときに、父親が一所懸命看病していたんですけれども、その父親がぼそっと一言、「なぜうちの子がこんな目に遭わなければならない」というその一言が、すごく心に残っております。

ここはセントラル総合病院の小児科なんですけれども、僕の日本とか、ほかの先進国と言われる諸国の病院の印象では、小児科というのは、その多くが、生活の中で子供たちがけがをしたり病気をしたりした子供たちばかりが、治療を受けているような気がします。けれども、ここに来ている、もう亡くなっていて、白いシーツをかけられていて放置されている遺体とか、あと、けがをして痛くて泣き叫んでいる子供たちというのはすべて大人が起こした戦争で犠牲になった子供たちばかりです。この子たちに何も責任はないというふうに思うんですけれども、なぜこの子たちがこんなに傷を負わなければいけない、短い人生を終わらせなければならないのかということをいつも矛盾として感じます。

これは3歳の女の子が、空爆によって起きた火災で全身に大やけどを負ってしまって、その治療を受けているところなんですけれども、彼女の叫び声が病院中に響き渡ったよりも、僕はすごく印象深かったのはこのおかあさんの方です。母親だから何かしてあげたいというのはあるのでしょうけれども、何もできない。とにかく泣きながら、涙を流しながら頭をなでているというその姿がすごく印象深かったです。

ここは、よくテレビとかの中継をやっていたパレスチナホテルの近くの検問所なんですけれども、各地にこのような土のうを積んで検問所がつくられまして、ここにＴＶとボンネットに張った車が止まっています。これは報道の車なんですけれども、こういうものに対してもとにかくチェックがすごく厳しくて、通り抜けるたびにボンネットを開けられて、シート下とか、あとボディーチェックとか、もう片っ端からやられてようやく通してくれるというような状態でした。

しかも、今現在もそうでしょうけれども、各検問所でちょっと不穏な動きとか引き返したり逃げたりすると、結構撃たれてしまうんですね。容赦なく彼らは引き金を引いてしまいますので、それによって誤射という、誤って撃たれるということなんですけれども、そ

ういう形で殺されている普通のイラク市民というものがとても多く出ておりました。

それで、そこからなぜ突然アイスクリームを食ったおやじなんだろうというのがありますけれども、僕は初めにお話しましたとおり、イスラム圏というものがとても好きで、取材を続けているんですけれども、その中でやはり友だちとかになるわけです。もちろん、イスラム教徒でありますし、アラブ系であったりとか、そういう方々ばかりです。要するにあまり日本でなじみのない方々の友人がたくさん各地におります。で、僕は日本の報道とかいうのを聞いておりますと、どうしてもすべてのイスラム教徒は全部悪いみたいな言い方をされている気がしてなりません。悪いというか、イスラム教イコールテロリストみたいなレッテルを張られている気がしてならないんです。でも、現地を知っていて、かつ現地人の友だちがいる、現地の人間と接したことのある僕らとしては、すごくそれは違和感を感じるんです。

これはバクダットのアイスクリーム屋さんなんですけれども、アイスクリーム屋さん、すごく多いんですね。イラク国内に。暑い国ということもあるかもしれません。僕は日本でもアイスクリームが好きでして、お店によく行ったりするんですけれども、日本ではなかなか入りづらいんです。女子高生とか女の子ばかりが多くて、なかなか買いに行けないというのがあるんですけれども、イラクはとても入りやすかったです。なぜなら、お客がおじさんばかりだからですね。この奥に4人ほど並んでおりました。このショーケースにアイスクリームが入っているんです。いまだに僕にはなぞなんですが、2種類しかないのにすごい悩んでいるんです。

僕はどっちも食べてみたんですけれども、どこが味が違うんだろうというのがあって、ますます彼らが悩んでいたのがなぞです。そう思っていると、このブルーのシャツの似合うおじさんが出てきまして、聞きもしないのにそのおじさんは「僕は毎日食べている」と言うのです。いや、聞いてねえよと思いながらいたんですけれども。

要するに、このように普通のアイスクリーム好きのおじさんとかが、生活している。ただ本当に肌の色が違うだけ、宗教が違うだけ、言葉が違うだけで、僕らと変わらない人間たちがそこで生きていて、現在そこで人が苦しんでいると。同じ地球上の住民が苦しんでいるんだというふうに僕ら日本人もとらえなければならないのではないかと思います。

それに、よくテロリスト呼ばわりされている、あと自爆テロというふうによく言われておりますけれども、起きたことよりも、なぜそこまで彼らが追い込まれているのかと、なぜそういう行動をするのかということを、原因をもっと考えなければならないというふうに思います。

これは何かわかりますか。遺体の右手です。遺体がこう横になっていて、2体あるんです。

これは僕がバクダット市内を歩いておりまして、ちょっと郊外の方で、サダムパレスと

いうサダムの宮殿があったところの近くを歩いておりましたら、結構行方不明者がたくさん出たわけです。今のパキスタンの地震のように、やはり爆撃とかで埋まってしまったりとか、建物の下敷きになったりとかいう方々がたくさんおりまして、行方不明者がたくさん出ております。

ですから、家族は一所懸命探しているわけです。たまたまですけれども、その見つかった自分たちの親族を掘り起こしている場面に出くわしまして、話を聞きました。この亡くなった彼は、買い物に行ったきり帰ってこなかったそうです。たぶん、空爆によって亡くなったのかどうされたのかわかりませんけれども、普通の一般の市民であるというようなことを言っておりました。もしかしたら、この人は見つけられなかったらこのまま白骨化して誰にも見られることなくそのまま土に帰ってしまったかもしれません。これは、「カウントさえされない命」というキャプションをいつもつけているんですけれども、イラク戦争以来、数えられているだけで約29,000だったかな、たくさんのイラク市民が亡くなったというふうに言われております。

たぶん、実際にはそれ以上だと思います。数えられているだけでそれだけの数ですので。

しかも、その7割が女性と子供であります。でも、これはほかの紛争地域もすべてそうです。

日本でやはり、今、戦争体験者という方は高齢化が進んでおりまして、実際に体験した方、すごく減っております。それで、僕らの年代もそうですけれども、実際に戦争というもののイメージは、武器を持った兵士ばかりが戦っている、殺し合っているイメージがあるかもしれません。でも、それは戦争の映画の中の話であって、本当は僕らと同じ普通の市民たちばかりが犠牲になるわけです。仮にこの我孫子市が戦場になったとしたら、皆さんのほとんどが犠牲になるわけです。戦争というものは、一般市民を巻き込まないことはまずあり得ないですし、もともと一番弱い立場の国民とか市民とか、そういう方々が一番犠牲になっていくんだということを、それが戦争の姿であるということを今一度とらえ直さなければならない時期にきているのではないかと、僕は思います。

場所が変わりまして、パレスチナというところです。地図上ではイスラエルというふうになっています。ヨルダンの横にありまして、地中海に面しておりまして、南部の方のガザというところは昔はすごくリゾート地として有名なところで、魚のおいしいところです。ここは四国より少し大きいくらいのところなんですが、簡単に言うと、ユダヤ人の占領下のもとにパレスチナ人が生きているような状態になっていて、約半世紀以上たっています。多分1948年からそのような状態が続いているというふうになっています。

そんな中でインティファーダーと呼ばれる民衆蜂起が始まりまして、現在は第2次インティファーダーと言われているんですけれども、要するに占領されている側のパレスチナ人たち、正確に言うと少年たちが多いんですけれども、子供たちが思い思いに自分の家で

つくってきた、石を投げる機械をつくってきてですね、これをイスラエル兵士に投げるということで自分たちの気持ちをあらわすというか、不当な占領に対する抵抗するという運動が始まりました。それでこれは始まってすぐの写真なんですけれども、子供たちが先ほどのひもがついたものをくるくる回して、このジープに向かって石を投げているわけです。ここの土が盛ってある部分が境界線になりまして、ここはラマラのベットエルチェックポイントと言われるところで、ＰＬＯのヤセル・アラファトが亡くなりましたけれども、彼の元事務所があったところでもあります。

ここは境界線になりまして、子供たちが石を投げている側、こちら側がパレスチナ自治区と呼ばれるパレスチナ人が住んでいるところです。ジープがいる側、こちらが白い建物が見えますけれども、こちら側のきれいな方はユダヤ人の入植地と呼ばれるところです。ここを守っているイスラエル兵士たちが乗っているのがこのジープなんですけれども、これに向かって彼らは石を投げております。もともと僕がこの世界に入ったきっかけでもあったのですけれども、石しか持っていない彼らに対して、武器を使う、銃を使うというのがどうも不公平に思えて、なぜそういう行為をやっているのかということが知りたくなってここに行ったのが、僕のスタートであります。

こうやって見てわかるとおり、彼らは石に対して銃を使うわけです。僕は何十回というこのインティファーダーというものを撮影に行きましたけれども、いまだかつて子供たちが投げた石が兵士に当たってけがをしたということは見たことも聞いたこともありません。ですけれども容赦なく銃を使うわけです。一般的にはゴム被膜弾というものを使うんですけれども、すごく安全そうな名前ではありますけれども、実際には鉛の玉にゴムが薄くコーティングされてあるだけのものでして、からだに刺さらないだけです。頭に当たりますと、簡単に頭蓋骨を破壊されてしまいますし、それによってたくさんの子供たちが亡くなっています。それでも十分威力があるのにもかかわらず、実際には実弾を使っております。本来ならば、先ほどの土が盛ってある部分、今は壁ができているんですけれども、そこを越えなければ実弾は使用してはならないという安全協定が本当は結ばれています。ですけれども、それを無視して撃ってきているわけです。しかも、ゴム弾と一緒に撃ってきているので、当たるまでどっちがどっちかわからないのです。

大体、投石、インティファーダーの翌日というのは必ずと言っていいほど、葬儀が行われます。

パレスチナ自治区では、パレスチナ人たちはユダヤ人の兵士たちに殺された人間はシャフィード、殉教者というふうに呼んで、町を挙げて葬儀を行います。これは17歳の高校生が石を投げている最中に撃たれて亡くなって、その子の葬儀の模様です。

日本に住んでおりますと、銃とかそういうものがどのようにして人を破壊していくのか、傷つけていくのかということが実感としてわかないかもしれませんけれども、小銃と言わ

れる一般的なものでさえ、相当な威力があります。この子は右目に被弾して後頭部に弾が抜けたんですけれども、たった1発の弾で脳みそが全部外に出てしまいました。おなかに当たると簡単に腸は飛び出しますし、そういうもので人が人を殺しあうというのが紛争であり、戦争であるというふうに思います。

人間が人間を破壊するため、殺傷するためにつくられる兵器というものは、年々残虐性を増して、威力を増しています。その究極が核兵器なのではないかというふうに僕は思います。

その葬儀はそのままお墓まで遺体を持っていきまして、皆で埋葬していくんですけれども。向こうは土葬でして、白い布に包んで埋葬されていきます。こっちに先ほどの彼の遺体が今、入っていくところなんですけれども、この横ですね。既に新しい墓穴が掘られてあります。それだけ毎週のように、ほとんど毎日のようにこういう葬儀が行われているといった状態です。

なぜ勝ち目もないのに、そういうことを続けるのか。もともとインティファーダーという行為は自分たちの不当な占領をどういうふうに世界に発信していくかと。要するにその意思表示を世界に伝えるために始まったという見方が強いんですけれども、そんな中でまたやっているくらいにしか世界的には見られておりません。多分、今でもそういうことが日常的に行われておりまして、アピールしている、でも世の中は見てくれないというような状態になっているのが現状です。

2002年4月にジェニンというパレスチナ人の北部の町が、正確に言うと難民キャンプなんですけれども空爆を受けました。空爆を受けてミサイルが落ちたところの家の天井なんですけれども、夜中にミサイルが降ってきたんだと。ここに誰もいなかったからよかったものの、いたら皆死んでいたというふうにこのおじさんは言っておりました。町はこんなふうになってしまったんですけれども。この奥に見えます建物がありますが、これはもともとこのような状態だったのが跡形もなくなるほど空爆を加えられたわけです。1,000人以上亡くなったというふうに言われています。

なぜこんなに大規模な空爆を行ったかというのは、2002年くらいから今で言う自爆テロという行為が始まった時期でもあります。それに対する報復ということで、ここが空爆を受けたわけです。でも実際にはそのやった人間とは全く関係のない地域でしたし、あと、日本ではよく自爆テロとかそういう言い方をされる、そのテロとつくのがどうも、僕は何もかもそういうふうに言い過ぎなんではないかなというふうに思います。このパレスチナで行われていたその自爆テロという行為もこちらではそういうふうに呼ばれていました。ですけれども、僕は自爆攻撃をした、爆弾をからだに巻いて検問所で爆発させて攻撃をしたという高校生の母親とかに何人か会ったことがあります。でも、実際には、個人的恨みがほとんどなんですよね。自分の友人が殺されたから一矢報いてやりたいというふうに

日々言っていたとか、そういう個人的な恨みなんです。ですから、僕はテロではないのではないかなというふうにも思います。

今現在イラクで行われていることも、僕は決してそういうことを肯定するわけではありません。どういう形であれ、人を傷つけるのは僕はすごく許せない行為ではあります。ですけれども、やはりそれをすべてテロと片づけてしまって、どんどん攻撃の手をゆるめないというのはどうなのかなというふうにも思いますし、もともと数年前までそんなことはあり得なかったわけですし、イギリスでもテロはありましたし、ニューヨークとかでもあるかもしれないというふうな感じで警備が続いております。日本もそうです。数年前までそうでしたかね。こんなに厳しかったですかね。日本でも僕はよく新幹線最近使うんですが、ごみ箱が使えなかったりとかするわけです。昔はそんなことがなかったはずなんですけれども、なぜそういうふうになってしまったのかという原因をすごく見落とされている部分なんではないかというふうに思っています。

こうやって人がたくさん殺されていても、なかなか助けというか、ＮＧＯとかもなかなか入ることができなくてですね、それでも人々はここで生きているんです。

この地域は先ほど、ずっと占領状態が続いていると言いましたけれども、最もそれがわかりやすいのが検問所だというふうに思います。こういう検問所が各地に70カ所以上存在します。

ここは、四国より少し大きいくらいの国なんです。だからすごく小さい国なんです。占領されている側のパレスチナとパレスチナ人というのは、すごく動きが制限されています。どこに行くでもこの検問所を抜けていかなくてはならない。ここでよく射殺されたり、病院に行きたいけれどもここを通してくれなくてそのまま亡くなってしまったという人たちもたくさんおります。これは柵の向こう、パレスチナ人が歩いて通っているんですけれども、そこにこうやって銃を向けて、常に向けられているんです。こうやって監視された状態にあるわけですね。これが本当にすごく非人道的なことだというふうにも思いますし、人間扱いされないんだなということをすごく思いました。

あと、今年5月に基地問題で揺れる沖縄の方にちょっと行ってきたんですけれども、その時に沖縄を降り立った瞬間、僕はこのパレスチナという国と沖縄というのがすごくかぶって感じました。

場所変わりまして、アフガニスタンです。やはりイラクの戦争の問題というのはいろいろな意味で日本がかかわっているということもありまして、関心は高いというふうに思っております。ですけれども、僕はその前に2001年10月7日から始まったアフガニスタンに対する空爆というものに対しても、僕は日本はかかわっているというふうに思っています。要するに、空爆が始まったとき、その空爆機というのが海に浮かぶ空母から飛び立ったものなんですけれども、それは実際に沖縄から出ているわけです。燃料とかは僕らの税金か

ら賄われています。僕はこれを、日本は今すごく加害者なのではないかと思っているんです。間接的ではありますけれども。でもそれをわからないように、知らされていないのではないかなと。知らす機会がないのではないかと、されていないのではないのかというふうに思えてなりません。イラクのことばかり取りざたされていますけれども、現在でもアフガニスタン、空爆が続いています。戦争中でもあります。この写真は、僕は去年9月にアフガニスタンに入ったものなんですけれども、そのときも僕は白昼堂々空爆している爆撃機の姿を何回も見たことがありますし、実際に散発的な戦闘もよく行われておりました。ここでは、日本では報道されておりませんけれども、国連職員が2人とか3人殺されております。要するにちょっとイラク化しているわけです。あるアメリカ人、米兵に聞いたら、今はイラク行きよりもアフガニスタン行きをいやがる兵士がいるというふうなことを言っておりました。その言葉からも、ここはまだ戦場であるということが言えます。

ここはまだ全然終わっていないわけです。この写真はそのジャララバードというパキスタン側の国境の町と、あとカブールという首都とを結ぶ検問所なんですけれども、水を売っている水売りの子供の後ろにＩＳＦと書かれた装甲車にまたがった兵士がいます。主にこれは多国籍軍です。

主にドイツ軍が駐留しておりまして、本当にすごい迫力でというか威圧感で、銃を常に向けている緊張状態でありました。

それからも、本当に全く終わっていないのだなということを改めて感じさせられました。

戦争というものは、直接的武力で傷つき亡くなる方ももちろんいらっしゃいます。ですけれども、難民とかいろいろな形でつめ跡を残していくわけです。目に見えるもの、あと想像しやすいもの、爆発残留物というものもたくさん残します。これはジャララバードという町の病院に張られていた、不発弾とか地雷とかさわってはだめよというポスターなんですけれども、こういうものが各地に張ってあるんです。こういうものが張っていない日本というのは、すごく僕は平和でいいなというふうにいつも帰国すると感じるわけです。アフガニスタンは現在700万発地雷が残っているというふうに言われております。これは世界で2番目の数字です。

ちなみに1番はイラクとかアンゴラというアフリカの国です。1,600万発残っているというふうに言われています。全世界で現在7000万から1億1,000万発、地雷は残っている、埋められているというふうに言われていますけれども、その数は年々増えております。ＮＧＯとかそういう団体が撤去しているのが年間約10万発ですけれども、年間に250万発から500万発増えています。現在でも20分に1人、世界中のどこかで地雷の犠牲になっている人がいるという計算になっています。

地雷というのはなぜ簡単に埋められていくのかというのは、一つはコストの安さにあります。

1発が大体300円から500円くらいでできてしまうんです。でも撤去するのに最高10万円くらいかかるということもありまして、すごく莫大な費用と時間がかかっていくという中で増え続けているというような状態になっています。

ここは地雷被災者の病院でもあるんですけれども、カンボジアの方でも今年取材をしていたのですが、アフガニスタンでもそうでしたけれども、地雷の被害に遭う人間というのは貧困な層とか農民が多いわけです。これ簡単な話で、地雷がないところなんかは土地の値段が高いこともありまして、貧乏人は住めないんです。そういうこともあって、地雷の被害に遭いやすい、地雷原のそばで生活をしなければならないという人たちが犠牲になっているというような状態になっています。

こういう子供たちがごみを拾っている姿というのは、発展途上国という言い方も嫌いですけれども、発展途上国と言われる国にとってよく見かける風景でもあります。

彼らは学校に行くことなく、要するにごみを拾ってこれを売って生活しているわけです。去年のデータですけれども、首都のカブールだけに限りますが、学校に行っている子供たちが大体8割から9割いるというふうに言われています。これはこういう国にしては、戦時下の国の中にあって、すごく高い数字だというふうに思いました。でも、それは学校が全く足りなかったりするんですけれども、その中で1日に1時間か2時間抜けて、仕事の合間を見て学校に通える、あと学費がただであるということもあって通っている子供が多いのではないかというふうに思いました。けれども、2割から1割の子供たちは学校に行くこともなく働かなければならない状況になっています。

それで、識字率がすごく低い国です。こういう国に行きますと指さし会話手帳という、ちなみにアフガニスタンはペルシャ語なんですけれども、そのペルシャ語で書いた言葉を指でさしてコミュニケーションとるという本を持っていくのですが、全くと言っていいほど役に立たなかったくらい、識字率が低いところでもあります。ですから、学ぶことなく働かなければ生きていけないという人たちが多いというものがあるのではないかというふうにも思いました。

あと、ごみを拾っている子供たちに中身を見せてくれと言ったら、一番高いのだと言ってアルミ缶を見せてくれました。これを鉄くず屋さんに持っていきまして、大体日本円で10円から12円ほどで引き取ってもらうそうです。中には学校の先生より稼ぐ子がいるそうなんですけれども、そうやってしていけば彼らは食べていけます。生きていけます。ですけれども、正直命がけなんですね、この子たち。なぜかと言うと、この子たちは朝5時半くらいから夜の10時くらいまで見かけることがあります。で、1人で行動するんですね。世界的にもそうなんですけれども、子供の誘拐とか人身売買とかそういうものに巻き込まれていくケースというのがすごく多いです。アフガニスタンのこの地域では、誘拐された子供たちは臓器売買に利用されているというふうに言われています。要するにこの子たち

の臓器が、誘拐された後売り物にされるということです。商品になっているんです。

最後の国でもありますけれども、カンボジアですね。カンボジアと言うと、皆さんぱっと思い浮かべるのがあの世界遺産のアンコールワットと、地雷とかそういうものだと思います。

ちなみにカンボジアは世界で3番目に地雷が多いところです。600万発というふうに言われています。現在ではこの看板が、地雷原の看板なんですけれども、デンジャーマインズと書いてありまして、要するにここから地雷がありますよという印なんですけれども、その裏からもう家が始まっているわけです。集落があります。ここはバッタンバン州というところの小さな農村になります。人口300人しかいないんですけれども、月に2人から3人、地雷の犠牲になっているそうです。だったら地雷原の近くに住まなければいいのではないかというふうに思われますけれども、現在まだ地雷がなくなったというふうに認識されている部分もありますけれども、カンボジア全土の約13％の農村が現在も地雷が埋まっている状態になっています。

全然撤去が進んでおりません。そのこともあって、あと、農民の土地がほとんどなんですね、地雷が埋まっているところというのは。だから彼らはそこから離れてしまうと生きていけないわけです。ですから、こういう地雷原のそばで生活しなければならないというような状態になっています。あと、生活用水をくみに行くのに、毎朝地雷原を通って川に行かなければならないんです。これは子供たちの仕事です。ですから、ここに一つ井戸があれば、その地雷被害は防げるというふうに村長さんは言っておりましたけれども、その井戸を掘るお金さえないわけです、この地域には。その際も現金収入を得ることがすごく難しいですね、今のカンボジアの農民たちにとっては大金ですので、それを出すことができないんです。ちなみに井戸は2万円から3万円で掘れるんですけれども、そのお金さえない状態にあります。

その状態を見て、なんとかしなければと地雷の撤去のボランティアを始めたのがこの彼なんですけれども、これは僕の友人でもあるアキラというカンボジア人です。

彼は、5年前からこうやって現地に出向いて、地雷撤去を無償でやっているわけです。

このときは今年の2月なんですけれども、地雷撤去に行くんだけれども一緒に行くかというふうに言われましてついていったものです。

この探知機を使って地雷を探し始めましたけれども、30分もたたないうちに1個目が見つかるくらい、たくさん集中しております。で、見つけたＰＭＮというロシア製の対人地雷です。

こういうものが、これは1980年代に多く使われたものだというふうに聞いています。ここが受圧板というところになりまして、ここに3キログラムから5キログラムの圧力がかかると爆発するようになっています。この信管というものを抜いてしまえば爆発物というも

のは基本的に安全です。極端な話、この信管を抜いてこの外側だけ、爆薬は入っているんですけれども、これを火の中に入れたって燃えるだけで、爆発しないんです。この信管を抜く作業が一番神経を使うそうです。

これ、3時間くらいでこの数が見つかるんですよね。

この下にありますけれども、ドーナッツ型のものがあります。これは中に入っていた爆薬です。これはＴＮＴという一般的に世界的に使われているプラスチック爆弾です。これはダイナマイトの約3倍くらいの威力があります。でも、有毒なガスと、あとこれ自体がとても有毒でして、これ1かけらが人間のからだに入りますと、中毒死してしまうほど毒性の強いものです。

地雷というものは、基本的に人間の寿命より長いんです。大体50年から100年というふうに言われています。それを裏づけるかのように、このときたまたまですけれども、この戦車用の地雷というのが見つかったんですね。これは先ほどの爆薬が10キロ入っているんですけれども、それも今ばらしております。これは驚いたことにベトナム戦争当時のものなんですね。ＭＴ10というロシア製のものを中国が生産したものだそうです。まだ生きているんです。ちゃんと作動するんですね。ですから、一度地雷というものは埋められるとその土地をほぼ人間の一生分以上汚染し続けると。だから、その土地はさわれなくなってしまうんですね。農地にそういうものが埋まっている、畑を耕すことができない、お金を得ることができないという人たちがすごく今でも増えているわけです。地雷というものは、特に人間用の地雷ですけれども、殺傷能力を抑えてあります。わざと殺さないんです。命までとらないんです。それは地雷の一つの目的でもありますけれども、手足を吹き飛ばして仕事をできないような人間をたくさんつくって経済的な圧力がかかるというのもあります。ですから、このカンボジア人の農民たちは、こういう物と背中合わせで生活をしなければならないというようになっています。

この持って帰った地雷を、このアキラというのが自分のうちの博物館で展示してあるそうなんです。僕はいつも片づけろと言うんですけれども、あいつ片づけないんですよね。今まで彼は5年間で約6,000発処理してきます。それをこうやって展示してきておるんですけれども、これはシェムリアップというアンコールワットのある町にここはあります。

ですから、今後、皆さんここにいらっしゃる方が、もしアンコールワットに観光に行くということでもありましたら、ここに寄っていただけたらすごくうれしいなというふうに思います。

入場無料ですし、アキラがいれば下手くそな日本語ですけれども、日本語で今のカンボジアの置かれている状況とかを説明してくれます。場所がわからなくても大丈夫です。タクシーの運転手にアキラのうちと言えばわかります。よろしくお願いします。

ここは地雷の被害に遭った子供たちが17人、共同生活をしています。要するに、お金が

ないとか遠くて学校に通えないという子供たちをアキラが引き取って学校に通わせているわけです。

この子がそのリーダー的な存在のハックという19歳の男の子なんですけれども、彼は8歳のときに空き地で遊んでいるときに地雷を踏んで、右足から下がなくなりました。今でも地雷被害が後を絶たないということもありまして、こういう義足とか義手とか製造して提供している団体があります。これはザ・カンボジアトラストという、首都のプノンペンにあるＮＧＯなんですけれども、イギリスのＮＧＯです。それで、僕も初めて知ったんですけれども、義足というのは、大体カンボジアだと1本1万円から1万5,000円します。日本円で、日本人の感覚からするとそんなに高くないなというふうに思いますけれども、カンボジア人の公務員の月給の平均が2,000円ちょっとです。それから考えると相当に高価なものだということがうかがえます。

ここではその義足を初めて使う方のためにトレーニングセンターとかもあります。

でもこれがあるということは、今でも被害があるということになります。

農村部で生活ができない人たちが、希望の川といわれるごみ捨て場なんですけれども、ここでごみを拾って生活をしなければならない状態になっています。ダイオキシンを含む煙が常に充満しておりまして、ここに取材に行くたびに僕はのどをやられてしまいます。

あるＮＧＯの方がここで生活する子供たちのからだを検査したところ、大量のダイオキシンとこれまた重金属、水銀とかそういうものが大量に検出されたそうです。

こんなところでも人が生活しているわけです。彼らはここでしか生活できないわけなんですけれども、ほとんど農村から出てきた農民たちです。こちらに見えているのがごみ捨て場なんですけれども、そこの向かい側に家を建てて生活しております。ここ1日働いても大体約80円くらいしか稼ぐことができません。いかにカンボジアが物価が安いとはいえ、80円では一家皆が生活できません。ですから、彼らは何を食べているかというと、ここに出る残飯を食べています。僕もごちそうになりました。この彼女の家で、ダーさんというんですけれども。

ごちそうになりましたけれども、かなり酸っぱかったです。おとなだったら多少傷んだものも我慢できますけれども、子供とかがこういうものを食べて生きていかなければならないのかということを考えると、すごくなんとかならないかなと思いました。これも結局内戦とか戦争が直接的ではないですけれども、間接的に生んだ結果です。

時間になってしまいました。あと話し切らなかったことがあるんですけれども、この人身売買とかもすごくカンボジアというのはひどくて、女の子とかはそのまま売春宿に売られるというケースがとても多いです。イラクとかほかの国もそうですけれども、イラクとかは別だな、ほかの日本以外の国で、日本があまりかかわっていないとかかかわりがないというようなところというのは実は少ないです。カンボジアなんかもそうなんですけれど

も、その人身売買によって売られた女の子たちが売春宿で働かされている。その女の子たちを買いに行くセックスツーリストという連中がいるんですけれども、その8割が日本人だというふうに言われています。

ですから、そういった意味も含めて、かかわりは必ずありますし、やはり世界のできごと、あと、同じ地球上の住民としてやはり受けとめていかなければならないのではないかというふうに思いました。

やはり、大人が起こしたことでそういうもので子供が犠牲になると、そんな変な流れが今、世界中で渦巻いているような気がします。やはり大人の一員として僕はこの流れをなんとか変えたいというふうに思って、これからも取材を続けていきまして、このような形であれ、本であれ、雑誌であれ見ていただいて、皆さんと一緒に日本人として日本としてどうあるべきかということを考えていけたらすごくうれしいなというふうに思っております。

最後までどうもありがとうございました。（拍手）

○司会　郡山さん、どうもありがとうございました。

皆さん、本当に憤慨するやら、新しい事実というか、イラン、イラク、カンボジア、アフガニスタン、ニュースで見る限りでは本当にわからない子供たちの日々、それから人身売買と、本当にあってはいけないことがたくさん語られたわけです。郡山さんの目で本当にたくさんの方々にこれをやっぱり訴えていっていただきたいなというふうに思います。

郡山さんがアイスクリームが好きだということも、きょうわかりましたし、お疲れさまでした。

本当に、長いこともっともっと講演を聴いていたいなというふうに思います。

短い時間で本当に大変申し訳ないなというふうに思いました。

では、お疲れさまです。

皆様も後ほど、郡山さんに向けてのご質問をぜひたくさん書いていただきたいというふうに思っております。きょう、皆さんが来た特典と言いますか、郡山様がお書きになりました著書をきょうはロビーで販売しております。終了後、またご本人からサインをちょうだいできるかなというふうに思っておりますので、どうぞ帰り際に見て行ってください。

どうもありがとうございました。（拍手）

それでは、2人目のご講演者の方を紹介させていただきます。

松村五郎様、どうぞお願いいたします。

松村五郎さんのプロフィールを紹介させていただきます。

1981年に陸上自衛隊に入隊なさいました。2000年3月にアメリカにご留学なさいまして、2004年7月から12月まで第3次イラク復興支援群長としてご活躍されています。現職は陸上幕僚監部運用調整官を兼ねての統合幕僚会議事務局第3幕僚室に勤務なさっていらっしゃ

います。

テーマは「イラク復興支援の現実」。お願いいたします。

○松村　皆さん、こんにちは。きょう、こうやって我孫子市で戦後60周年ということで戦争の体験がだんだん風化していく中でこの戦争と平和を考えるという催しをやっているということに対して、本当に私、安全保障の第一線に身を置く者として敬意を表しますとともに、そういう催しにこうやって参加されている方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

今、郡山さんからのご講演ありましたけれども、先ほど市長さんがおっしゃっていらっしゃいましたように、やはりいろいろな立場の人の考えを聞くというのはとても大切なことだなというふうに思います。私も今、話を聞かせていただいて、とても心に残るところがいっぱいありまして、きょう郡山さんのお話が聞けてよかったなというふうに思っている次第です。

私、今ここに制服で立っておりますけれども、これは別に皆さんを威圧しようということではありませんで、自衛官という職業には皆さんあまりなじみがないかと思うんですね。実際今、ご親戚に自衛官がいるということでもなければ、あまり自衛官の人の話を聞くということもないと思いますので、きょうは私、自衛官の一人として実際に第一線において自衛官がどういうことを考えて日々活動しているのかということを皆様に知っていただくために、ちょっと印象づけていただくためにこの制服を着て話をさせていただきます。

自衛隊というのは、戦後創設されまして、冷戦の時代というのは日本の国を守る、日本に対して何らかの侵略があった場合に国民の命と財産生活を守るということのためにずっと活動してきたわけですけれども、近年は冷戦の構造というのが崩壊しまして、1990年代からはむしろ、この世界の軍事組織、みな自衛隊以外もそうなんですけれども、自分の国の国防ということ以外に、これはまた引き続き大事なことではあるんですけれども、20年先30年先、日本を攻撃してくる国があるかないかわかりませんから将来にも必要なことなんですけれども、特に90年代からこの2000年の初めにかけては世界の各地におけるこの不安定な状況、紛争とか、これを各国が協力してこの紛争を予防したり、あるいは起きた紛争を途中で仲裁に入って、これをやめさせたり、あるいはその後の復興をしたりということのためにこの軍事組織を使うということが世界的に注目をされるようになってきまして、自衛隊もその中でそういう活動に積極的に使われるようになってきたわけです。ＰＫＯというのがありますけれども、この二つの国、あるいは一つの国の中での紛争というものを間に割って入ってこれを仲裁をし、その紛争が再発しないようにそこの間に割って入るというような活動もあります。

実際、自衛隊もゴラン高原というシリアとイスラエルの間の地域のＰＫＯにもう既に10年間、これはあまり皆さんに、カンボジアとかと違って報道もあまりされませんので知ら

れておりませんけれども、10年間続けて、継続的に45人の自衛官がそのＰＫＯで勤務をしているというようなこともございます。

また、戦争のみならず自然災害の面でも、昨年はスマトラ沖の津波災害に対して陸・海・空の自衛隊の船とか飛行機、輸送機ですね、ヘリコプター、そして地上でこの救援活動をする隊員というのが派遣をされまして現地で活動してきましたし、またついこの2、3日前ですけれども、パキスタンの地震に対して、この被災者に対するヘリコプターによる物資輸送等をするということで陸上自衛隊、航空自衛隊あわせて300人の隊員がきのう、おとといと相次いで日本を出発しまして、ちょうどきょうパキスタンに降り立ってこれから活動を始めようかというようなところであります。

そういう中で、私自身は昨年まで東北の秋田というところの連隊がありまして。そこの連隊長ということで東北で勤務をしていたんですけれども、そのときにイラクの復興支援に自衛隊も活動してこいということで、第1次。第2次隊というのは北海道から派遣をされ、第3次隊がちょうど去年8月にイラクの方に派遣をされました。これは東北の方からですね。青森、岩手、秋田という北東北3県の隊員が集成部隊として集められまして、私がその指揮官ということで第3次イラク復興支援群長ということでサマワに行って、去年の8月から12月まで4ヶ月間、現地において活動してきましたので、きょうはそのときの経験を皆さんにお話したいというふうに思います。

自衛隊というのは、いわば手足ですよね。自衛隊が何をするのかということを決める頭脳というのはこれは国民の皆さんなわけです。もちろん直接的にではなくて、政治という一つの間接的な手段を通じて、頭脳として国民の皆さんが政治家を選んで、その政治家が政府をつくり、その政府が日本としてこういうことをやりなさいという頭脳としての命令をすると。私たち自衛官というのは手足でありまして、この頭脳に命じられたことをしっかりと、その頭脳が考えたとおりにやってくるというのが私たちの仕事なわけです。ですが、この手足が今どうなっているのかということを実際の指の先が今どこにあるのか、どんなことをしているのか、何をさわっているのかということがわからないで頭脳だけが空回りしても、これはうまくからだとして機能しないわけでありまして、きょうはその手足の先がどうなっているのかというところを皆さんにごらんいただいて、主として映像を使ってお話をしたいと思いますけれども、そして皆様一人一人がその頭脳ででではこれから自衛隊をどういうふうに使ったらいいのかということを考えていただければというふうに思います。

きょうお話をしますのはこちらにございますけれども、サマワというところがどんなところかという基礎知識から入りまして、今そこで人々がどういう暮らしをしているのか、そして自衛隊がどういう活動をしているのかと。最後にそこに派遣された私たち自衛隊の隊員の思いというものをお話をしたいというふうに思います。

まず、サマワというところですけれども、このイラクがあります、このイラクの中のムサンナ県という赤い色で囲っているところがありますけれども、ここが自衛隊が復興支援をして来いということで命じられた、指定された地域であります。

これは九州よりもちょっと広いぐらいの、かなり広い地域になるんですけれども、人口は44万人ということですから、人口密度は非常に低くて、この一番北側のところ、川が流れていますけれどもムサンナ県の一番北を流れている川がユーフラテス川ですね。その北を流れているバクダットの右側のところを流れているのがチグリス川、チグリス・ユーフラテスという、皆さんがよく学校で習ったメソポタミア文明の発祥の地であります。

その川沿いが人口が大体集中しているところで、この地図で言うと緑色になっているところは砂漠です。ですからほとんど人が住んでおりませんけれども、その中にもぽつんぽつんと町がありまして、そういう砂漠の中の町も含めて自衛隊がこの九州よりも広い地域を走り回っていろいろ学校を修復したりという活動を続けているところであります。

今メソポタミア文明と言いましたけれども、その遺跡がこういう形で残っておりまして、これはウルクの遺跡というサマワの町のすぐ近くにあるところですけれども、5000年前の都市文明が栄えたところでありまして、5000年前はこういう都市国家だったんですね。ですからイラクの人たちはそれをとても誇りに思っています。自分たちがそういう人類の文明発祥の地の一つに住んでいるんだという誇りもあります。そして、その誇りをもって早く国を再建したいという、この自分たちの国の歴史を誇りに思っている人々だということです。

この中で、左側の下のところにトロッコがありますけれども、第2次大戦前にはここをドイツが発掘をしていたということで、ちょうど映画のインディジョーンズにこういうシーンが出てきます。そういうインディジョーンズに出てくるようなシーンがここで展開をされてトロッコとかを使って発掘がされていたというところです。

右下のところには金網がありますけれども、これは自衛隊の復興支援活動の一つとして、これはユネスコ等から依頼がありまして、この遺跡を盗掘から守る、さっき郡山さんの話にも泥棒さんがいっぱいいるという話がありましたけれども、盗掘から守るためにこのフェンスを修復してくれということがありまして、それを活動の一環として自衛隊が地元の人たちと一緒に実施をしているところであります。

そして、実は今はイスラム教でアルコールはご法度でありまして、私たち自衛官も地元の文化を尊重して現地で活動している期間は一切アルコールは飲まない、また豚肉も食べないということで4カ月間活動してきたんですけれども、実はビールというのは世界でこの地で初めてできたということで、ビール発祥の地だというようなところであります。

そういうビールがおいしいところだということなんですけれども、すごく気温が高くて百葉箱の中で測った気温でも50度近いところまでいきます。ここに書いてある最高最低と

いうのは私が実際にこのサマワ宿営地の中にいたときに測った最高と最低なんですけれども、8月から12月までの間に最高は百葉箱の中で測って49.9度、約50度ですよね。それを実際ひなたの空気の気温を測りますと、60度近いというところであります。だから冬も暖かいかと言うと、冬は今度寒くなりまして、ほとんど0度に近いところまで冬は下がると。春と秋がなくて、ちょうど11月20日の日なんです、今でも覚えていますけれども、11月20日を境に、その前の日まで暑い気温が続いていたのが、一挙に冬になりまして、何か秋がなくていきなり夏から冬になってしまったというようなことを経験いたしました。

あとは、砂漠ですから、砂漠と言いましてもじゃりじゃりの砂ではなくて、きな粉みたいなほこりのような砂ですね。これは砂あらしという形で、ひどいときには50メートルくらいしか先が見えなくなるというようなところであります。そこで人々は暮らしているわけですけれども、ここにありますように、この羊市場というのが真ん中の写真にありますけれども、現地ではこういうふうに羊を飼っている遊牧民のベドウィンの人たち、これが町に羊を追い立てて、朝になると来て、羊を売りに来ると、これをトラックとかでこの町の人が買いにくるということで、これは自衛隊の宿営地のすぐ近くで3キロくらい離れたところにある広場なんですけれども、ふだんは何にもない広場にこういうふうに朝になると市が自然発生的にできまして、そこでこの羊を買った人がすぐその場で電信柱に羊をつるして、この首を切って血を出しているんです。それで皮をはいで皮と肉をばらばらにして持って帰るということで、私たちはここのすぐ、前の道路、ここの今写真に写っている道路をいつも毎朝支援活動のために通ったんですけれども、そのたびに羊から血が吹き出ている光景を見せられてぞっとするような、朝からそういうものを見せられながら、どきどきしながら復興支援に向かったりということをしておりました。

そこで人々が暮らしをしているわけですけれども、ここにいい大人が5、6人たむろして手を振っていますけれども、皆さん、こうやって自衛隊の車が通ると、大きな日の丸がついているんですね、自衛隊の車には、こういうふうに皆さん本当に笑顔で手を振ってくれます。

最初に私8月にサマワに行ったときに本当にびっくりしたのは、空港から飛行機を降りて自衛隊の車に乗ってこのサマワの町に入りますと、道の周りに歩いている人とか、あるいは田んぼで、田んぼというか畑ですね、畑で農作業をしている人はその作業の手を休めて自衛隊の車に手を振ってくれるということで、この日本がとても地元の方たちに受け入れていただいているんだなということをつくづく最初感じまして、びっくりするくらいでした。

これは去年防衛庁長官とか自民党とか公明党の政治家の方も現地に視察に来られたんですけれども、皆さんびっくりして、本当に皆地元の人たちに歓迎されているんだねということでびっくりされておりました。

ただ、この人たちはこうやって町中でたむろしているんですけれども、仕事がないんですね。

現地は失業率が50％以上ということでして、食べる物にはあまり事欠かないくらいの、ある程度の配給は受けているんですけれども、現金収入が全くないということで、物を買うことができないんですね。どうにか食べていくのがやっとというような生活の状態です。

あと、もう一つとても印象的だったのは、子供たちの目なんですね。これが本当にきらきらして、きれいな目をしているんですね。隊員たちはこの中で活動していくときに、先ほど申し上げたような本当に暑い中で活動しているんですけれども、この子供たちの目を見たり、子供たちにこうやって活動現場で声をかけてもらったり、日本人はヤバーニーと言うんですけれども、ヤバーニーと言って皆子供たちが駆け寄ってきてくれるんですね。こういう子供たちの本当にきれいな瞳にとても勇気を与えられて、では頑張ろうという気になったものです。

イラクという国は、これはイスラム圏全体にある程度共通かもしれませんが、子供をとても大切にする国で、イスラム教の教えの中でも、子供というのは自分の子供というだけではなくて、神様がこの世に遣わした存在だというようなことがありますので、子供たちをとても大切にします。また、イラクというのはサダム・フセインいろいろ悪名は高いですけれども、教育制度に関しては、ある程度しっかりした教育制度というのを国の制度としてはつくっておりまして、とても町に住んでいる人たちは教育熱心で子供たちをなんとか学校に通わせようと。これは家がかなり貧しくても子供たちにはある程度ちゃんとした服を着せて学校に通わせようという意欲、子供たちをきちっと育てたいという意欲がとても強い国です。

実際にしっかりしたその学校制度の中で、うまくその中で大学まで行けた人というのは大学教育もかなりある程度の大きな町、このサマワの町もムサンナ県の中で一番大きな町ですけれども、こういうところでは大学教育というのもしっかり行われておりまして、大学の教育は全部英語で行われています。これは教科書がエンジニアの教科書とか、あるいは医者になる医学の教科書とか、あるいは法律家になる法律の教科書とか、それが皆英語の教科書を使っていますので、皆さん英語が話せる。ということで、ある程度の、その大学を出た知識人の方たちは皆英語を話せるという、そういう教育もかなり国際的な社会の中で生きていけるような教育というのがある程度なされているということで、今のこの不安定な治安状況というのがなくなれば、国としての発展というのがかなり早いんではないかというような印象を受けました。

そして、私たちもそういう英語を話せる人たちを通訳として雇って、現地の人たちとの間の通訳になってもらったというようなことで活動をしておりました。

イラクというのは、今はフセイン政権が崩壊をしてすぐですので、そのフセイン政権崩

壊ということによる社会の混乱というのが大きいんですけれども、もっと長い歴史の中でこのイラクを見てみますと、今ちょうど明治維新のころの日本のように、かつての田舎、今でも田舎に残っているのは部族社会ですね。この左側の下の方にありますけれども、こういう田舎の典型的な家です。田舎でも都会でも家は日干しれんがなんですけれども、そういう部族の社会ではこの部族長の権威というのがものすごく高くて、法律よりもこの部族のおきて、日本の江戸時代の村のおきてのように部族のおきてで社会が構成されていると。ですから、その村の中でのもめごとが何かあったり、あるいは犯罪があったりしたときに、この部族長の屋敷の中に集会所みたいなものがありまして、そこに部族の長老が集まって、当事者をそこに集めて、長老の前でその当事者がそれぞれ自分の申し立てをして、それによって長老が裁定を下すと。

ですから、盗みがあったとかいうと、これもそれによって長老がそこで裁きを下すというようなことがこの田舎の部族社会では行われていると。これはかつてのイラクの社会です。

それに対して今度は都会の生活というのは、この部族社会がいやで、部族の村を飛び出したり、あるいは大学に行って教育を受けて、この町で働きだしたりということで、その部族社会から抜け出した人たちがむしろこの町で生活をしていると。ですから町は一定程度の市民層というのが、部族の社会とは別の市民意識を持った、近代市民意識を持ったようなそういう市民層が育っていると。これは今インターネットとかもありますから、ある程度世界の情勢とかもつかめますし、英語教育も受けている方が多いですから、そういう世界の中で自分たちが市民意識を持って、これからのイラクをどうつくっていこうかという、そういう層が都市には生まれてきていると。そういう二重構造になっているというような印象を受けました。

そこが今、イラクが大きく転換をしているという、そういう歴史の中でこのフセイン政権の崩壊という一つのイベントが起きて今、混乱状態になっているというふうに感じました。

そして、今問題なのは、フセイン政権の時というのは、圧倒的な中央集権社会だったんですね。その中央集権に反対するものは容赦なく弾圧をする、命までも奪って弾圧すると。そういう体制でしたから、すべてが中央に向いていたわけです。ですから地方自治というものは全くなかったということで、今ムサンナ県ということを申し上げましたけれども、フセイン政権時代には、ここに県の行政組織はありませんでした。中央から派遣をされた役所、道路局は道路をつくり、教育局は学校を運営するという、そういう中央の省庁の出先機関としての機能的な局があっただけでありまして、地方自治というのは全くなかったと。

私たちが実際に現地に行って困りましたのは、自衛隊というのは今回、国連のＰＫＯの

ように上部組織から何かこれをやりなさいと言われてその与えられた任務をやるというのではなくて、ムサンナ県に行って、ムサンナ県の人たちが望むことを復興支援としてやって来なさいということで日本の政府から命じられて行ったわけですので、現地で向こうの人と調整しないといけないんですね。何から始めましょうかという調整をするのに、その地方自治体がない。

ですけれども、それをつくろうとして今、県知事という人が選挙をされて任命をされたり、あるいは県の評議会という県議会のような組織がつくられたりということが起きているんです。

けれども、ここに今いるのはハスサーニさんというムサンナ県の県知事さんですけれども、県知事さんがいて、県知事の事務所というのはあるんですけれども、県庁というのはないんですよね。県知事さんとその周りの秘書のような方がいるだけで、県庁というような役所の組織というのはまだないわけです。ですから県知事さんがどういうことを誰に命じるかという、そういう権限もはっきりしていない。かたや、県の評議会というのがありまして、評議会の議長さんとかもいるんですけれども、評議会が何を決めるのかというその権限もはっきりしていない。ですから皆さんがその中で自分のやりたいことをいろいろ主張されるわけです。

また、もともとフセイン政権の出先機関だった道路局とか教育局とか保健局とかそういう局も、それぞれ、またフセイン時代からずっとその局長さんが同じ人もいますし、新しく任命された方もいるんですけれども、それぞれがそれぞれの立場で別々のことを言うと。また、部族は部族で部族長さんがまた、うちの部族にはこういうことをやってくれと言う。

ということで、これをやはり、県は県としてどういうふうに意見をまとめて県の復興というものを考えていくのかというのを、それは県知事さんと県の評議会で話し合ってその仕組みをつくってくださいとか、そういうことを自衛隊の側から働きかけて、地元で各部族を集めて優先順位をちゃんとそこからニーズを聞いて、優先順位をつけてくださいと、そういう地方自治の仕組みをこういうふうにやったらいいのではないですか、こういうふうに意見をいろいろ聞いたらいいのではないですかということをこちらからいろいろアドバイスしたり、あるいはサジェスチョンしたりして、その中で地方自治の仕組みを育てていきながら、自衛隊が地元でつけてもらった優先順位に従ってこの復興支援活動を進めていく。そういうことをやってきたわけです。ですから、本当にそこは行く前には思ってもみなかったことで、こんなことをしなければいけないのかなというので大変苦労したところではあるのですけれども、ただ物をつくるとか直すとかいうことではなくて、社会の仕組みをつくり直して新しい民主的な社会をつくっていくという中の復興をお手伝いしているのだなという実感が本当にわくような仕事であります。

具体的にどういう仕事をしていたかということですけれども、一言で言いますとインフ

ラの整備なんですね。インフラがかなり荒廃してしまっているということです。この荒廃した理由なんですけれども、二つあります。

一つはフセイン政権時代に、特に南東部の地域、イラクの南の方の地域ですね、ここはシーア派というフセイン政権の基盤としていたスンニ派とは違う宗派の人たちが多数派を占めている、圧倒的多数を占めている地域でありまして、90年代初めには反フセイン蜂起ということで、フセイン体制に反対をする暴動を起こしたりということがありまして。これに対してフセイン政権は徹底的にこれを弾圧をしたと。ですから、例えば私の通訳をしてくれた現地のガスさんという青年がいるのですが、彼も94年ごろ、自分の父親がある日突然いなくなってしまった。

そうしたら、反フセイン活動に彼の父親も共鳴をしていたので、多分そのフセイン政権に連れていかれたのだろうというふうに思っていたら、どこでどういうふうに抑留されたりしているのかなと心配をしておりましたところ、このフセイン政権崩壊後に、このサマワの町のすぐ近くで大虐殺の跡が発掘をされまして、そこから彼の父親の遺品も見つかったということで、ある日突然拉致をされて連れていかれた人たちが、大量に虐殺をされていたというような事実があるわけです。ですから、南東部の地域とかクルド人地区、北の方ですね。そういう北のクルド人地区と南のシーア派の地域というのは、比較的治安が今安定しているんですけれども、なぜかと言いますと、いろいろ理由があるんでしょうが、そのうちの一つはフセイン政権に対する憎しみがものすごく強いんです。フセイン政権時代に自分の肉親をフセイン政権によって虐殺された人たちというのがいっぱいいるわけです。ですから、確かにアメリカが今やっていることに対して怒りを覚える面もあり、反発を覚える面もあり、米軍に対してもろ手を挙げて賛成というわけではないんですけれども、フセイン政権に対する憎しみというのがそれ以上にあって、今フセイン政権がなくなって新しいイラクの国づくりを自分たちの手で、クルド人もシーア派も参加をしてできると。そういう国づくりの意欲というのはこの地域にはあります。

ですからむしろテロリストになってこの多国籍軍と戦うというよりは、早くテロリストによる不安定な状況というのをなくして、皆が新しい国づくりに邁進したいと、そういう方向の気持ちが強いんですね。

ですからこの地域は安定をしているというわけなんですけれども、ただ、このフセイン政権が弾圧をした後、暴動というのは1回抑えられたのですが、その後この地域に対してある意味では見せしめというような形で全く社会資本に対する予算が投下されなかったと。ですから、90年代の前半から10年近く、全く上下水道にしても、かつてあったものに対するメンテナンスがされていない。電力網もそうですね。壊れたものが壊れっぱなしになっている。病院も病院にあった機材とか機械とか医薬品とか、補給をされない、また故障は修理をされないというまま放置をされてきまして、それでインフラが大幅に崩壊をしてし

まったということが一つあります。

もう一つは2003年のこの多国籍軍がイラクに入っていったイラク戦争のときに、この南のクエートの方から多国籍軍が入ってきましたので、これを迎え撃つためにフセインの軍隊が北から降りてきたと。そのときに学校とか、そういう公共施設にフセインの軍隊が駐屯していたわけです。そこを軍事目標ということで、多国籍軍の航空機が爆撃をして、学校等がこの右上の写真にありますように壊れてしまっていると。それがまだ修復をされていないと。

この二つの理由がありまして、かなりいろいろな面で社会的なインフラというものが破壊をされている。これを直すというのが自衛隊に与えられた任務でありました。

その中で、大きく三つあります。

給水支援、医療支援、公共施設の復旧整備ということで、給水支援につきましては、最初平成16年2月から自衛隊が活動を始めて、今約1年半になるんですけれども、当初の1年間で約5万トンの水を地元の方たちに供給しまして、そしてその後、日本は二本柱というか、車の両輪ということで、自衛隊の活動と、あと外務省が主唱しております政府開発援助ＯＤＡ、これを使ってその両方で現地の復興支援活動を進めていこうというようなことをやっておりまして、この給水については上水施設を日本のＯＤＡで現地につくりまして、イラクの方たちが運営をするというのが今年の2月に始まりましたので、こちらの方に自衛隊から給水の任務を受け継ぐということで、自衛隊は今給水支援はやめまして、そのＯＤＡ施設でイラクの方たちが実際に水をつくっているというふうになっております。

そして医療支援ですけれども、これも実際にイラクの方たちを自衛隊の医者が行って診るということをやってもいいのですが、それをやると、その前に韓国軍が実際に現地にすぐ近くのナシリアという町に入ったのですけれども、韓国がそこで病院を開いて、韓国軍の医者が町の人たちを診ましたら、現地は先ほど申し上げましたように教育水準も高くて、医者の方はいっぱいいらっしゃるんですよね。ただ、病院のインフラがちゃんと機能していなくて、医者の方たちも活躍できないという状況になっているので、むしろ多国籍軍のところの病院に患者さんを連れてきてしまうと、地元の医者の人たちからは患者泥棒だというふうに言われてしまいまして、むしろそういう、地元の医者の方たちの手助けをする、技術指導をしたり、あるいはＯＤＡでそこに新しい医療機材を据えつけて、その使い方を向こうの医者の方とか看護婦の方に教えるということの方がいいだろうということで、そういう活動をしておりました。

あとは公共施設の復旧整備ですけれども、これも現地の失業率が非常に高いということで、また自衛隊の隊員ができるところは1カ所とか2カ所の現場しかできませんので、むしろ現地の方たちを雇用して同時に20カ所30カ所という現場で仕事をしまして、現地の人たちにその雇用を生み、働き口を提供するとともに同時に多くの場所で復旧活動をするとい

うような方式を取りまして、今までに70カ所くらいの道路、学校等の補修が終わりまして、今約30カ所を手がけているということです。それによって今まで延べ30万人くらいの働き口、雇用というものを生み出しているということでやっております。

これは給水支援の現場ですね。この右下のところにキャプテン翼のステッカーを給水車に張っているところがありますが、これは日本のＯＤＡで現地に供与した給水車なんですけれども、これに、先ほど地元の子供たちが私たちにとても勇気を与えてくれるということがありましたけれども、これは外務省の職員も5人ほど現地に一緒に行っておりまして、このＯＤＡで現地に供与する給水車に、その職員の方の1人がぜひ子供たちに喜んでもらえる給水車にしようということで、このキャプテン翼というサッカー漫画が現地ではキャプテンマジンドという名前でとても子供たちに人気のアニメです。これは衛星放送で現地にも放送されていまして、今、かなり小さな田舎の家でもパラボラアンテナがここ皆ついていまして、テレビをみているんですね。このキャプテンマジンドというのがとても人気があるものですから、子供たちに喜んでもらおうと思ってこういうステッカーを外務省の方で用意をして、張っているというところです。

これは医療支援ですね。このように病院を巡回してＯＤＡで買った機材を据えつけましたり、あるいはＯＤＡで救急車を現地に供与しましたので、ただ、救急車は物だけあってもこれはやはり機能しないわけで、その救急車に乗る救急救命隊員を育成しないといけないということで、そういう救急車の要員を教育をするというのも自衛隊の救急救命士がこうやって地元の人に教えてやっていると。そういうＯＤＡと自衛隊の活動というのをうまく組み合わせてやるということをしております。

これは、地元の方たちを雇って、いろいろな公共施設を復旧しているというところです。

こういうふうに道路も生活道路、大きな幹線だけではなくて、その下の写真のような生活道路にしましても本当に荒れ果ててしまって、家が下水道が整備をされていないものですから、家の前の道路に下水を流してしまうと、家の前の道路がぬかるみになったり、あるいは真ん中に極端な場合溝ができてしまったりして、車も通れないような道路になってしまうということで、こういう道路と下水道とかを一緒に整備するというようなことをしております。

これは学校です。イラク戦争時の空爆等によって破壊された学校がそのままになっておりまして、この中でも、この残された教室を使ったり、午前午後で2回に分けたり、あるいは青空教室でやったりということで、苦労しながら子供たちの教育をなんとか早くまた軌道にのせたいということで現地で皆さん苦労されておりますので、学校の修復というのはとても現地で喜ばれております。

これは診療所です。診療所も同じようにこういう修復活動というのをしております。

あといろいろなスポーツ施設等の復旧です。

ここにありますのは何かと言いますと、現地の人たちにアラビア語で配ったビラを日本語に訳したものなんです。現地はやはり非常な混乱状態にあります。終戦直後の日本でヤミ市があったり、あるいは進駐軍の物資を横流ししたとかという話を聞きますし、またロシアでもソ連が崩壊した直後にロシアマフィアが濡れ手に粟の商売をして、荒稼ぎをしたというようなことがありますけれども、イラクは、まさにフセイン政権と一つの秩序、これは恐怖政治による秩序でしたけれども、その秩序が崩壊をしたということで、やりたい放題になっているわけですね。復興支援のお金も世界から流れこんできます。お金が流れ込んできて混乱状態の中にそのお金が流れ込んできますと、汚職・腐敗・あるいは賄賂というようなものが横行しまして、その役人に賄賂を渡して自分の業者に請け負わせる、あるいはそれを法外な値段で請け負わせるというようなことがかなりはびこってきておりますので、自衛隊の復興支援活動はそういうところに巻き込まれてはいけないということで、この入札制度、完全な入札制度ではないんですけれども、入札に準じたような制度を現地でいろいろ説明をしまして、こういうふうに公正に業者選定をしますよというようなことを現地にお知らせしながら、商習慣を確立をしながらやりました。本当に、こういうところでも社会の復興そのものをお手伝いしているんだなということを実感したところであります。

もともとイスラム社会というのは、けちだとか、お金に汲々としていることは悪徳なんです。

お金に対しては鷹揚として人にも自由に物を、自分の物にこだわらないで、人にも物を分け与えるということが美徳とされているのが、もともとのイスラムの教えなんですけれども、貧すれば鈍すというか、今はそういう状態ではなくなっています。

私たち、現地に行く前に、イスラムの、あるいはアラブ社会の専門家の方たちにいろいろとどういうことに気をつけたらいいでしょうかということでアドバイスをいただいたんですけれども、そのときに聞いたことの一つで、人の持ち物を褒めてはいけないというのを聞いたんですね。いい腕時計していますねとかというと、ではこの腕時計をさし上げますというふうに、褒められたら人にその物をあげるというのが美徳であるというふうにされている社会なので、簡単に人の物を褒めてはいけませんと。ですから、人のうちに行って、奥さんきれいな人ですねなんて言ったら大変なことになりますというような、そういうアドバイスも受けたのですけれども、それが残念なことに今は、貧すれば鈍す、というような状態になってしまっているということです。

ここにありますように、背広を着ている日本人の、私が今、迷彩服でここにいますけれども、この右側にいる人は外務省の人です。外務省の方がこうして5人ほど、600人の自衛隊の隊員と一緒に現地にいて、そのＯＤＡの活動をしております。

また日本各地の方々からいろいろ冷水機とか文房具とかイラクの子供たちに渡してくだ

さいというようなことでいただきましたので、これを現地に運んでいって、航空自衛隊の飛行機と、陸上自衛隊のトラックで運んでいって現地で配るというような活動もしております。

また、私がこの群長として現地で特に心砕いたのは、イラクの国民との交流ということです。

やはりＯＤＡとか何かより、物とか建物をつくるということだけではなくて、実際に自衛隊員が600人も現地に行っているわけです。日本人がそこに600人もいるわけです。ですから、できるだけ日本人の真心というものをイラクの人たちに知ってもらいたいということで、特に子供たちにいろいろ喜んでもらいたいと。今、戦争が終わった後で本当に子供たちが自由に遊べるような環境がないということで、その子供たちにいろいろ喜びを与えてあげたい、いろいろ遊びを提供してあげたいというようなことで交流活動等を実施しました。

その甲斐があって、現地の方々からも逆にその子供たちが学校を直してくれてありがとうという形でこういうお礼のデモに来てくれたり、あるいはいろいろ署名活動をしてくれた商店会の方たちが自衛隊に対する感謝の署名を持ってきてくれたりしたことがありました。

また、アラビア音楽のバンドがこういう歌をつくって自衛隊に慰問に来てくれて、彼らのつくった歌を披露してくれたりと、そういう心と心の交流ができたというのが本当によかったなというふうに思っています。

ですから、現地の住民の人たちの気持ちというのは、本当は99％くらいの人たちが日本隊の活動を支持してくれているんですね。ただ、日本にもよく過激派というのがおりますように、ごく一部の過激派がある時ボンと破撃砲弾を撃ってくるとか、そういうことで、それも住民の人たちが見えるところでやるとすぐに住民の人たちが警察に通報しますから、そういう住民の人たちが見えないところで夜、ボーンと撃ってすぐ逃げるというようなことで、若干迫撃砲の事案があったりということがありましたけれども、圧倒的多数の人たちが自衛隊の活動を支援してくれているというのが今のその南東部での現実です。

これは北の方の治安が悪いところに行くとなかなかそうはいかないと思うんですけれども、今自衛隊が活動している地域というのは、こういう地域であります。

その中で最後に、私が現地で、特に隊員にいつも口を酸っぱくして言っていましたのは、このスローガンでありまして、油断せず、助け合って、真心支援。そういう一見何気ない生活をしているようですけれども、やはり現地というのは、そういう北部の方にいる人が自衛隊も多国籍軍の一員であるというような認識で、テロをしかけてくるということも十分考えられるので、こういう小銃を持って警備をしていますけれども、こういう油断しない、すきのない態勢というのがあるからこそ初めて、イラクの人たちと一緒に復興支援活

動というのもできるというのが、悲しいことに今のイラクの現実であります。これがもっと治安がよくなって、ＮＧＯの方ですとか、ＯＤＡによるジャイカとかＯＤＡ関連の企業の方がどんどん入っていけるようになれば、もっと大きな復興支援活動ができると思うんですけれども、悲しいことに今のところは本当に自分の身を守るということを最低限できる自衛官でないと、復興支援活動はできないという現実があります。

その中で、隊員いろいろな仕事があるんですけれども、隊員たちが助け合ってやっていこうということを現地では強調しました。そして最後には真心支援ということで、心の通う支援をやっていこうということに心がけてきたところであります。

それでは最後にＤＶＤで、今私が申し上げたようなところの実際の現地での光景というものを皆さんに見ていただきたいというふうに思います。

（ＤＶＤ上映）

これで私の話は終わりますけれども、今でもパキスタンの方でもイラクの方でも、実際に自衛官が第一線で活躍をしております。またその姿というのを皆さんにご関心を持っていただいて、ぜひどういうことをしているのかということをご理解いただいた上で、いろいろまたご意見いただきたいというふうに思います。

きょうはどうもありがとうございました。（拍手）

○司会　松村様、どうもありがとうございました。

私たちはなかなかその自衛隊の方たちの生活、日々練磨されているご努力がこういうところで実っているということも、本当にきょう映像を通じて知ることができました。

私たち国民を頭脳とおっしゃっていただいて、自衛隊の位置づけを手足というふうにおっしゃってくださいました。また、そういう私たちの責任ということも、平和をやはりもう一度改めて考えるということで、活性化させなくてはいけないのだなという責任を非常に強く感じました。

本当にありがとうございました、松村様。（拍手）

それでは3人目になりました、きくちゆみ様の講演をいただきたいと思います。

どうぞ。（拍手）

それではプロフィールを紹介させていただきたいと思います。

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロをきっかけにグローバルピースキャンペーンを立ち上げられたそうです。イラク戦争ではイラク市民の側からの映像を世界に発信するなど、国際的な平和活動を展開していらっしゃいます。現在、世界各地で講演を広げていらっしゃいます。

それでは、きくちゆみ様、お願いいたします。よろしくお願いいたします。（拍手）

○きくち　ただいま紹介をいただきました、きくちと申します。

私は千葉県鴨川というところに住んでおりまして、同じ千葉なんですけれども一番南で

すね。

きょうは車で来たんですが、約3時間かかりました。千葉って広いんですね。

それで、私はもともとは環境問題を専門にいろいろな活動をしてきました。

生まれは東京の葛飾区というところで、ここから意外と近いところで生まれ育ちましたけれども、今から8年ほど前に環境問題をずっとやっていく中で、自分の食べるものを自分でつくるというのは基本だなということ、それから自分の出すごみを土に返したいと、そういう希望がありまして、今住んでいます鴨川というところに移り住んで、お米と野菜を自給するような暮らしをしています。実はきのう稲刈りが終わったばかりで、やっとほっとしているところです。

きょう、私がお話するのは、メディアでは伝えられないもう一つの戦争というタイトルでお話をしたいと思っています。私自身は今言ったように自給自足的な生活をしながら子育てを山の中でしていた人間、今でもしている人間なんですけれども、この2001年9月11日、あの事件をきっかけに対テロ戦争、テロとの戦いというような戦争が始まりまして、それに私たちの国日本も参戦していくというような事態になったときに、私はいても立ってもいられなくなったんですね。そもそも、あの9月11日の事件がどういうものだったかという話もきょういたしますし、今のイラクに戦争する必要があったのだろうか、戦争以外の選択肢というものはなかったのだろうかということを、今でも私は非常に強く思っています。

最初にお見せする映像は、アフガニスタンのある攻撃シーンを、ペンタゴンの方が撮ったものを内部告発的にインターネットに流した映像をお見せいたします。ここで何をお伝えしたいかということは、私たちがアフガニスタンの攻撃について報道で聞くときに、必ず米軍、あるいはスポークスマンが言う言葉がありました。我々は軍事施設だけをピンポイントで正確に爆撃しているということを必ず言いました。それで、私も実際にそうなんだろうと思っていました。しかし、今からお見せする映像を見ると、どうも軍事施設だけを正確に爆撃しているばかりではないというのが見てとれると思います。

（ビデオ上映開始）

この映像は、2002年2月ごろのアフガニスタンのある町、ある村の攻撃なんですけれども、夜の攻撃でＡＣ130号爆撃機というものを使った空爆のシーンです。

司令官と兵士の会話が入っています。英語で入っていますので適宜通訳していきます。

これは遠赤外線カメラというので撮っておりまして、人間とか温度の高いもの、火災、炎、そういったものは白く写るようになっています。

「長方形の建物が見えるか」というような発言がありますね。

「モスクがある、モスクは撃つな」というような発言がありました。

「長方形か正方形か」と聞きなおしています。

「長方形の方だ」というので、多分この上なんですかね。

「そのモスクに向かって3台の車が動いている、見えるか」

「はい、見えます。」

「ちょうど1台が今、向かっている。モスクに。見えるか。」

「まだ撃つな。照準を合わせて待機せよ」という命令を打ちました。これ、車ですね。見えますか。ゆっくり入っています。

イスラム教徒の方、1日5回お祈りしますので、終わって迎えに来たのかよくわかりませんが、中から1人運転手が降りてきました。右から1人、上からも1人、中にもう1人いる感じですね。今、車の周辺に4人くらいの人が集まっている様子がわかると思います。

そこに照準が合わさっている。

そこに対して爆撃があり、グッドショットと言ったんですね。これ、誤爆ではなくて、まさにその車と人をねらって爆弾を落としました。

で、逃げていきます。

「この車に対して次の攻撃をせよ」という命令がありました、もう攻撃されて炎が出て煙が出ています。

人とか車というのは軍事施設ではないですね。それから今、この辺、上の左端に人が10人くらいいたんですけれども、白い影があったのですが、ちょっと見えたでしょうか。そこにかなり大型の爆弾が落とされました。

それから1人の人間が逃げています。

このたった1人の人間、この人は軍事施設ではないと思うんですけれども、この人に対しても何発も何発も爆弾が投下されていきます。

外れましたけれども。

この映像というのは、誰がどういう目的でというのはわからないのですけれども、こういった内部資料ですね、あくまでもこれは極秘のものなんです。でもインターネットに昨年ぐらいまで流れていました。今はちょっと見えなくなってしまいましたけれども。ＡＣ130というので検索すると見ることができました。

この人の前に今何発か爆弾が落とされて、倒れました。

ここで今火だるまになっています。

というふうに、私たちは報道ではいつもアメリカが攻撃する際に、すごく正確に軍事施設に限ってなるべく市民の被害がないように攻撃をしているんだというのをいつも聞いているんですけれども、実際にはそうではない作戦もあった。その一つがこのアフガニスタンの攻撃だというふうに思います。

実際、亡くなっている方、とても多いですね。市民の、先ほどの郡山さんの報告でもございましたけれども、アフガニスタンでもイラクでも、亡くなっている方のほとんど、9

割以上は一般市民ですよね。

少し、先送りしてもらっていいでしょうか。

ちょっときょうは40分という時間しかありませんので、この後にシーンが変わりまして、ここはモスクの周辺なんですが、山岳地帯の攻撃に移ります。そのときに山岳地帯の洞窟をこう撃っていくんですね。このあと、止めてください。ここからもう1回見ましょう。

今続けて2発の爆弾が落とされたところから見ていきたいと思います。

大型の爆弾と小型の爆弾と二つ、左側の方を見ていてください。

この小さい方の爆弾が落とされたところから1人の人が逃げていきます。これですね。

彼はもう、多分けがをしているんだと思いますね。はって逃げているような感じが見えますか。

彼か彼女かわかりませんが、この人が逃げて行った先ですね。白い影がここに幾つかあります、これが死体なのか人間なのかわかりませんが、これに、逃げて行った人間に対して次も攻撃しろということで攻撃をしていきました。

攻撃している方の認識としては、彼らがテロリストだとか、そういう理由づけがあるんだと思うんですけれども、私がこの映像の中で一番気になるのは兵士同士の会話なんですね。

人間のからだに命中してからだがばらばらになるんです。そのときに、あいつばらばらになったよ、やったぜというような言葉が入っているんですね。兵士同士がそういうやりとりをして、本当にビデオゲームをするように殺人を楽しんでいるというのでしょうか、さっきの自衛隊の映像とは似ても似つかないようなことが行われています。こういうのを見てすごく、映像よりもむしろその若い兵士同士、せいぜい20歳とか22歳くらいの男の人たちの会話を聞いて、非常に恐ろしいものを感じました。

アフガニスタンというのは空軍がありませんので、彼らが攻撃される恐れというのはないんですね。非常に高いところからすごく安全な場所で爆撃をしているわけです。

ですから、そういう人たちがビデオゲームをするように、上からこう白いターゲットに向かって次々攻撃をしているというのが非常におぞましいと言いますか、恐ろしいと言いますか、我々がメディアで聞いている軍事施設だけをやっているんだというのではない、戦争のもう一つの現実というのを見た思いがしました。

（ビデオ上映終了）

これがアフガニスタンの攻撃だったわけですね。そもそもこのアフガニスタンの攻撃というのは、9月11日に起こった同時多発テロと呼ばれていますけれども、私は括弧つきで、あくまでもあれが本当に同時多発テロだったのか。誰がやったのかというのはいまだになぞなわけですけれども、その同時多発テロ事件の報復としてその首謀者であるオサマ・ビンラディンという人がアフガニスタンにいるからということで報復攻撃をしたわけですよ

ね。その後なぜかだんだん議論が今度はイラクの方に移っていって、アメリカの方では、最初は911事件とイラクの関係も取りざたされていました。それが関係がないということがわかりますと、今度はイラクが大量破壊兵器をたくさん持っている。サダム・フセインが大量破壊兵器を持っているんだということで攻撃をしなくてはいけない。これがアメリカの脅威になっているということで戦争をしなくてはいけないんだというふうになってきました。

実際攻撃をして、あるいは攻撃が始まる2003年の3月直前までは国連の査察団が行って、一所懸命この大量破壊兵器を探していたわけですね。ほぼ99％ないという状態で、あともうちょっと頑張れば100％ないと言い切れるところで、無理やりその調査を打ち切って攻撃が始まってしまったわけですよね。私はそれ自体もすごく問題があると思っています。そもそも、そこでもうちょっと頑張って査察して、完全に大量破壊兵器がないということを証明できれば、あの戦争は必要なかったのではないかと今でも思っているんですけれども、それはともかく戦争は始まってしまった。その後は大量破壊兵器がないということ、ついにアメリカ政府も認めました。そういうことは最近になって認めています。

しかし、今となってはその戦争の理由というのがそもそも大量破壊兵器ではなくて、サダム・フセインという独裁者を駆逐して新しいイラク人のための政権をつくるんだ、イラク人を解放するための戦争なんだというふうに、3回理由が変わっているんですね。

最初は911事件との関係、次が大量破壊兵器、そして三つ目にイラクの解放というふうに変わっていった。では、そのイラクの解放の戦争で殺されたのが誰だったのかということをちょっと見てもらいます。

ちょっと見にくい写真ですけれども、アルジャジーラから借りているものです。ファルージャというところで攻撃がありました。見たくない方は残酷な写真もありますので、目をつぶっていてほしいですけれども、非常にたくさんの子供が、ファルージャの包囲攻撃というので殺されました。あの包囲攻撃というのはどういうものかと言いますと、まず、町を包囲する。遮断、封鎖してしまうんですね。逃げられなくします。そのときに一般市民の方は逃げようとしたんですけれども、検問が厳しくて多くの方が逃げおくれてしまいました。それから、逃げられる人というのは逃げる手段、車を持っているとか、そういう人が逃げられるわけですけれども、動けない病人とか子供を抱えた人たちとか、たくさん町に残されたわけです。そういう方がたくさん殺されていったんです。ここに集められている写真というのは、そのファルージャの攻撃で犠牲になった人たちの一部ですけれども、非常に子供が多いんですね。

私はこの写真を見たときに本当にいても立ってもいられなくなって、911事件以降にやっているグローバルピースキャンペーンというキャンペーンを通じて、なんとかアメリカの市民に呼びかけて、アメリカの国民の戦争に対する意識と言うのですか、それを変えて

ほしい、戦争ではない方法があるのだということを訴えていこうということで、今でもアメリカの人たちと連携していろいろな活動をしています。

私はこの写真を見るたびになんで彼らが死ななくてはならなかったんだろうと、本当にくやしいのですけれども、この子は頭が吹き飛んでしまっています。本当に、郡山さんの話と重複しますけれども、大人が起こした戦争で巻き込まれて、全く無実の人たち、子供たち、二度と帰ってこないわけですよね。

こういった映像というのは、メディアでは流れません。特にアメリカでは流れません。というのは、戦争している国にとって一番こわいものというのは、国民の反対なんです。やはり、戦争をするということは国民の税金を使ってします。ものすごいたくさんのお金がかかります。

今回、2,000億ドルぐらい、アメリカは使っていますよね。

この小さな死体が痛々しいのですけれども、たくさん並んでいました。

先ほどの子供、1、2歳だと思います。

ファルージャの攻撃というのは、そうやって町を包囲しておいて、無差別に非常に一般の市民の住居に対しても攻撃がなされて、非常にたくさんの人が死にました。

そもそもの発端はアメリカの民間人が暴徒に襲われて、焼き討ちされて橋につるされたという事件がありました。覚えていますか、4名の方。でも、あの方たち4名の民間人と言いましても、アメリカの傭兵と言うのですか、民間の特殊な仕事を請け負っている軍事的な仕事をする人たちだったんですね。この子は本当に小さな赤ちゃんです。右側の方に手がありますけれども、手のひらにこの2倍くらいの、まだ生まれたばかりの赤ん坊ですけれども。

ということで、私たちはなかなか日本やアメリカのメディアでは流れないこういった情報を、このグローバルピースキャンペーンという、ここにＵＲＬが書いてありますけれども、ここでずっと発信をしてきました。来月くらいからこのＵＲＬ、ホームページのアドレスが変わります。もし、興味のある方がいたら、書き留めておいてください。このＵＲＬではなくて、globalpeace.jpに変わります。globalpeace.jpというところでこれからも、なかなかメディアが流さない、もう一つの戦争の側面ということを報道していきたいと思っています。

私たちが2001年9月11日の事件の直後に最初にやったことというのが、アメリカの新聞に平和の意見広告、戦争以外の方法を選ぼうよということを訴える意見広告を出そうということだったんですね。そのときになぜそういうふうに動いたかというと、9月13日、あの事件から2日後にブッシュ大統領がこれはアメリカに対する宣戦布告だ、報復をしなくてはいけないという演説をしたんです。とても有名な演説です。そのときに、1人の元軍人さん、海兵隊員の方なんですけれども、ベトナム戦争に参加したグレッグ・ニースとい

う人がブッシュ大統領に手紙を書いたんです。彼は、長い手紙を書いた中で、何を一番言いたいかというと、こういうことだったんですね。ブッシュ大統領、もしアメリカが1人でも無実の人を殺したら、アメリカこそがテロリストになってしまうんです。

アメリカが本当に自由と民主主義の国であるならば、国際法に委ねて解決をしなくてはいけない、絶対無実の人を殺してはいけないんだというような手紙を書いたんです。私はそれを読んですごく感激しました。というのは、あのときブッシュ大統領が演説をして、報復をしなくてはいけないとこぶしを振り上げたとき、アメリカの市民の8割から9割の方が賛同をしていました。世論調査では圧倒的多数の方がこのひどい事件、あのテロに対して報復が必要だというふうになってしまった。

私はそのときに待ってと思ったんですね。というのは、あの事件がもしテロであった。私はあのときは完全にテロだと思っていました。飛行機で突っ込んだ自爆のテロをした人たち、その犯人はもう死んでいますよね、その犯人が死んでいるのに、またどこかに爆撃をする、戦争をしてしまったらそれ以外の人が巻き込まれて必ず死にます。そういったことがテロの解決になるでしょうか。私は絶対ならないと思ったんですね。そんなのはもっともっとテロを生むだけであって、絶対解決にならないと直感的に思ったんです。そういうふうに皆も思っているだろう、思っている人はたくさんいるのではないかと思って呼びかけた、アメリカへの意見広告です。

それで私たちはインターネットでそれを呼びかけました。

そして、2週間でその費用、1,700万円なんですけれども、日本で約9割が、そして16カ国で約その1割が集まって、ニューヨークタイムスに意見広告を出すことができたんですね。軍人さんの手紙をそのまま出したんです。それが私たちのキャンペーンの始まりだったのですが、その後、いろいろなことを勉強していくと、そもそもアメリカのメディアがどうしてこんなに報道が偏ってしまっているのかというのがだんだんわかってきたんです。つまり、今のアメリカのメディアというのは、すごく買収とかが進んでいて、六つぐらいのメディアグループに資本が統合されて分かれています。

5、6個しかないんですね。それがすべて分散複合体とかエネルギー産業とか、そういう資本が持っている、経営しているというふうになっています。そうなってくると、本当に戦争に反対するような、反対されてしまうような情報というのが流れにくくなるんです。

そういうのがわかってきたので、ニューヨークタイムスに意見広告として、皆の集めたお金をあげるというのが本当に反戦の力に、平和の力になるのかというのが、だんだんわからなくなってきました。

その中で、もう一つのやり方として、ある出版物を支援しました。それが、私の元に送られてきた、この戦争中毒という本です。これは漫画なんですけれども、たった60ページ、70ページくらいの漫画、アメリカ人の方が書いた本で、アメリカが軍国主義を抜け出せな

い本当の理由というタイトルがついていて、漫画で、それの原稿を私に送ってきたんですね。それを読んだら、本当に私の知らないことばかりが書かれていて、よく調べるとすごく正確に取材がしてあるような、引用文献と原注が載っているような本でした。これはすばらしいからすぐに出そうと言って、アメリカの、私に原稿を送ってくれた人に電話をしたんですね。そして、私たちのキャンペーンで支援をして、この本をアメリカでまず出版しました。それから、この事実は日本でも知らせた方がいいだろうということで日本語でも出版しました。今からお見せする映像は、戦争中毒という、今度はアニメーション映画を、つくろうということで、その予告編をつくってきましたので、どうぞごらんください。

（アニメ映像開始）

「戦争中毒」。

「戦争中毒」。

「アメリカが軍国主義を抜け出せない本当の理由。」

この映像はパナマですね。1989年、湾岸戦争のちょっと前にパナマへの攻撃がありました、覚えていますでしょうか。

中心部はこんなふうに瓦れきの山になりました。

「この話はある金曜日に始まる。」

「何これ、政府って私の給料からこんなに持っていくの。」

「その日の夕方。」

「おかあさん、学校でバザーをするから手伝ってって。トイレットペーパー買うんだってさ。」

「最初は本だったわよね。今度はトイレットペーパー。あなたの学校って大丈夫なの。」

「次のＰＴＡで。」

「申し訳ない、地方税収は減り続けて、連邦政府の補助もないんです。学校にはお金がないんですよ。」

「あんなに払った私の税金は一体どこに行ってしまったの。」

「私たちの税金の多くが軍隊のために使われています。連邦政府の自由裁量予算のうち、軍事費は半分以上もの割合を占めています。」

「これではトイレットペーパー買えないよね。」

「アメリカ合衆国は史上最大規模、最強の軍隊を持っている。」

「アメリカの軍艦は世界の海を支配し、ミサイルや爆撃機はどの大陸の標的も攻撃できる。」

「常に数十万人の米兵が海外に駐留している。」

「数年ごとにアメリカは遠くの国へ兵士、軍艦、戦闘機を送りこんで戦っている。」

「地球上で戦争している国は確かに少なくない。」

「しかし、軍隊の規模や力、そして軍事力に訴えるという点でアメリカは唯一の国だ。」

「巨大軍事国家であり続けることを、また世界中で戦争することは大変高くつく。」

「国防総省の中に、毎年何千億ドルものお金がのみ込まれている。だから、アメリカ政府は普通の市民の暮らしに最低必要なお金は出し渋っている。」

「社会福祉や教育予算は切り詰められ、今やこの国の市民生活は大変荒廃し、その影響はどの国の軍隊がアメリカに与えたものより大きい。」

「しかも、外国の戦争でアメリカが払う犠牲はお金の問題だけではない。」

「二度と家に帰って来なくなった多くの兵士の命が犠牲になっている。」

「また、外国での戦争はアメリカに対する血なまぐさい復讐を生んでいる。」

「例えば、国防総省やニューヨークで、何千人もの命を奪ったテロがそれだ。」

「お金やかけがえのない人命の犠牲にもかかわらず、政府は迷わず戦争に突き進んで、私たち皆に損害を与えているのよ。」

「でも、どうしてアメリカはいつも戦争を始めちゃうの。」

「それを理解するにはこの国の歴史を知らないとね。」

「2世紀前、アメリカ合衆国は北アメリカの13の植民地の集合体にすぎなかった。それが、今では歴史上最強の帝国でさえ考えの及ばなかったほどの力でこの世界を支配している。」

「この世界最強の力を手にする道のりは平和的ではなかったのよ」

「これを頑張って勉強しないとだめだね。」

「第1章　明白なる運命。」

この明白なる運命というのが、曲者です。アメリカの白人が神様から委託された力、運命の力を持っていて世界を支配するんだという、そういう考えで今でもアメリカの政府の一部の人の中に根強くあります。

今からお見せするのはサンフランシスコの反戦デモの様子です。左側にいるのが、ジョエル・アンドレアスさん、この本を書いた人。この看板広告は私たちグローバルピースキャンペーンがこの戦争中毒の印税を使ってハリウッドのど真ん中に出しました。

このフランクさんという人が元軍人さんで、戦争中毒を出版した人です。私たちが彼の支援をしました。

「この戦争中毒を止めなければだめなのよ」と女の人が叫んでいます。

「この本だったらば、誰もが理解できると思ったんだよ。僕の知っている彼女は、戦争中毒を何百冊も買って、グリーンパーティのメンバーなんだけれど、僕もその彼女からこうやって何冊も買って、学校とか通りで配っているんだよ。」

この人は彼氏が海兵隊員です。「私の彼がこの本を読んでいたら、海兵隊の人が出てきて、なぜアメリカが戦争をするのか、その理由を話すのね。それを読んで私の彼はこう言った

のよ。

『おれは信じられないよ。こんなことのためにずっと戦ってきたのか』って。」

「皆さん、こんにちは。このとき私は生後1年の子をつれてアメリカのこのサンフランシスコのデモに参加しました。25万人の人がいました。戦争中毒のコピーを持っている人はいますか。きょう、私たちは二つのブースを出しています。この本は日本でもとてもよく売れています。私は翻訳しましたところ、たった1カ月の間に日本のアマゾンドットコムで第2位になったんです。」

「そのお金でこの看板を出しました。どうぞ私たちのブースに来て、この本を手に取って見てください。買わなくてもいいです。でも見て、もしよかったら皆さんの学校の図書館に持っていってください。」

ということで、この日学校関係者には無料でこの本を配りました。

「私はこのプラカードを、昨日雨の中、大急ぎでつくったんだ。戦争中毒の最後のページから取ったんだよ。一体全体戦争をして誰がもうけていて、誰が支払っていて、そして誰が死んでいるか、それを訴えるためにね。」

「さあ、ここでジョエル＝アンドレアスに登場してもらいましょう。ジョエルは私の友達であり、ＵＣＬＡで勉強しており、この本を描いてアメリカ中の人が目覚めるのを助けています。」

「ジョエル・アンドレアスです。フランクにも言ったんだけど、僕は長話はしないよ。まず最初に僕が言いたいことは、フランク・ドリルに対してありがとうということです。僕は戦争中毒という本を書いたけれども、フランクが出版してくれたり、ラリーやアンディが販売を手伝ってくれなければ誰も読んでくれません。そしたら意味がありませんからね。」

「僕は1960年代、ベトナム戦争のころに育ったんです。ですから、アメリカという国に対して二律背反の複雑な気持ちを持って育ちました。でも、そんな僕でもアメリカ人であることを誇りに思えるときがあるんです。それは例えば先週の土曜日、2月15日です。」

イラク戦争の直前ですが、2,000万人が反戦デモに立ち上がりました。

「今や我々は、全世界規模の反戦運動を立ち上げつつあるのです。」

これ、日本の女性のドラムチームです。サンフランシスコのですけれども。この日30万人歩いていました。ニューヨークは100万人です。

「我々はこの政府がやっていることに対して、影響を与える力を持っているんです。その力を感じ始めている。」

このプラカードは金持ちがもうけて、貧乏人が死ぬと書いてあります。

「まだ戦争が始まっていないというのに、高校のキャンパスを歩けば、ブッシュを落とせ、爆弾を落とすな、ブッシュを落とせとチアリーダーが踊っています。例えばＵＣＬＡ

の学生自治会が反戦決議をいたしました。そして、アメリカ中の通りを何百万人の人が占拠して戦争反対を唱えています。こんなことは前例がありませんよ。ベトナムシンドロームは今でも健在なのです。」

（アニメ上映終了）

ということで、私たちは毎年冬の3カ月の間アメリカに行って、アメリカのグループと一緒にいろいろな平和活動を行っています。この戦争中毒を配るというのもその一つですけれども、この次の映画をアメリカ各地で上映するというのも、もう一つの仕事です。

この次の映画というのは、タイトルが「テロリストは誰」という変わったタイトルですけれども、2時間ある映画なんですが、きょうは皆さんに全部をお見せすることができません。

それで、15分間のダイジェスト版をつくってきました。

ちょっとわかりにくいんですけれども、ダイジェスト版も見てください。

もともとのタイトルは、第三世界に対する戦争というのが原題です。

（ビデオ上映開始）

これは、私は911事件が起こるまでアメリカのこういった側面のことは何も知らずにきました。本当にそういったことを知らずに大人になってしまったのですが、よく調べていくとアメリカがこのようにイラクを攻撃したように、いろいろな国を攻撃したのは、今回が初めてではありません。いろいろな国に、これまで第2次世界大戦以降、何十回と攻撃をしています。

その歴史を爆弾が落とされる側の方から描いたものです。

字幕スーパーですから、ごらんになってください。

先ほどの戦争中毒を出版したフランコ・ドリルさんという元軍人の方が編集した映画です。

有名なマーティン・ルーサー・キング牧師です。

キング牧師はこの演説の後、暗殺されてしまいます。4日後でした。

この人はＣＩＡの元高官です。

憲法が危機なのは日本だけではなくて、アメリカも同じです。

これはメリアシェルターというところが破壊されたときの映像です。

そして、今後一番問題なのはその問題です。劣化ウランですね。

このときも、ノリエガというたった一人の人をつかまえるために、パナマという国を攻撃してしまいました。そして、何千人も死んでしまったんですね。イラクと似ています。

この人は元米国司法長官でありながら、今はこのような活動をしています。政府と全く違うことを、逆の事をやっています。

アメリカが世界の脅威だということを言っています。

「富はこの国を支配する。富が武力を使って、世界を我が物顔に支配している。」

「その責任は我々にある。いつか償うことになる。政府の武力干渉を完全にやめさせなければならない。」と私も同じように思うわけです。

最後の1人は元軍人だったブライアン・ウイルソンという人、彼がベトナム戦争から戻ってやっている活動を紹介します。

この人は列車にひかれて足を失いましたけれども、今でも本当に精力的に活動しています。

私と同じようにほぼ自給的な暮らしをしながら、いろいろな平和活動をしています。

アメリカにはこういう人がたくさんいるので、私は決してアメリカが嫌いではないんですね。

アメリカ政府がやっている戦争とか、外国へのいろいろな干渉に関しては、言いたいことがたくさんありますけれども、アメリカの中でこうやって現状を変えようとして頑張っている人たちと私たち普通の市民がつながって、本当に、武力によらないでいろいろな紛争、解決していく方法を選び取っていければというふうに思っています。

（ビデオ上映終了）

ということで、私たちはアメリカだけではなく日本国内でもこの映画の上映ということをやっています。

私の残された時間はあと5分ということですので、続けて見てもらいますけれども、そもそも9月11日のあの事件をもう1回、9月11日のアメリカで流されたテレビ報道を使って検証した映画を見てもらいます。

これはアメリカのラジオ局がつくった約52分の映画ですけれども、最初の5分間だけ見てもらって終わりにしたいと思います。

これはあの事件ですね。9月11日の。世界を変えてしまった対テロ戦争のきっかけとなった大事件。政府発表と実際の映像をよく見ていくと、いろいろ食い違いがあるのです。それを検証したアメリカのラジオ番組が製作した映画です。

このラジオ局の人たちもこんな映画をつくるのは初めてだそうです。

（ビデオ上映開始）

――「2001年9月11日、1時間15分の間に四つの事件が次々に起こりました。最初は東部標準時間8時45分、アメリカン航空11便が世界貿易センターのノースタワーに衝突。それから18分後の東部時間9時3分、ユナイテッド航空175便が世界貿易センターのサウスタワーに激突。さらに9時43分、アメリカン航空77便がペンタゴンに衝突したとの報道があり、そして最後に東部時間10時。ユナイテッド航空93便がペンシルバニア州シャンクスビルに墜落しました。2002年2月、私はあるホームページにひきつけられました。それはボーイングを探せ、あなたの視力を試せというタイトルでした。

私たちは皆、9月11日の9時43分にペンタゴンに激突した757型機があけたという大きな穴を既に見ていました。しかし、このサイトにある写真は、それが本当に起きたことなのかという深刻な疑問を投げかけていました。そこにはもっと小さな穴の写真があり、757型機だったらこんな被害で済んでいたはずがないと思わせる画像もありました。

つまり、757型機がペンタゴンに衝突したことを示す写真が幾つかあるに違いないと思ったのです。ところが、すべての写真を調べても、尾翼部や機首、胴体、主翼、エンジン、車輪、荷物、座席などが写っている写真が1枚もないのです。

757型機の残骸と思われるものの写真は全くありません。

さらに、ペンタゴンにあいた穴のサイズを見ると、幅は約19.5メートルで、ペンタゴンの高さは約22メートルです。757型機の翼の端から端までは38メートル。全長は47.3メートルで、高さは13.6メートルです。しかし、ペンタゴンの穴を見ると、その幅は約19.5メートルしかありません。これだけの大きさのものがどうしてたった幅19.5メートルの痕跡しか残さないのでしょうか。

貿易センターに衝突した飛行機が引き起こした火災が、余りにもすごかったので、鉄骨が溶解し、ビルを崩壊させた、と私たちは聞かされていました。ところが、ペンタゴンの左側を見ると、そこには煙や熱による被害など、ほとんど見られません。3階を見ると、コンピューターが乗っているファイルキャビネットがはっきり見えます。どちらも損傷していません。2階には木製の机があります。それも燃えていません。1階には奇妙な光景が映っています。木製のスツールにのっている本が開いていて、なんとページが焦げてもいないのです。

ペンタゴンの監視カメラが撮った五つの画像が公表されました。ただ、困ったことに五つの写真は問題を解明するどころか、さらに疑問を深めてしまったのです。

第1に画面の左下にある日付が間違っているのはどうしてでしょう。

第2にペンタゴンに衝突したはずの757型機がどこにも映っていないのです。

カリフォルニアのユニバーシティ出版の『アメリカ攻撃さる』です。その本はペンタゴンの攻撃について、194ページにこう書いています。

『ジェット機は幅30メートルのクレーターを掘り、建物の5階すべての壁を破壊し、ペンタゴンをぐるりと回る環状ビルの外側部分を崩壊させた。』

この写真を見てください。どこに幅30メートルのクレーターが見えますか。

では、15メートル。この写真ではそんなクレーターなどありませんね。

ここで質問です。どうしたら、757型機が4.8メートルの穴に入り、ペンタゴンの外に何の損害も与えず、残骸も残さないことが可能なのでしょう。これらは厳しく調査されるべき疑問です。……」――

これは合成写真です。これだけの大きさの飛行機が、ペンタゴンに突っ込んだことにな

っていますが、最初にあいた穴は5メートルしかないんですね。

――「……そして、ここにも尾翼、胴体、翼、車輪、エンジン、座席、荷物などの機体の残骸は一つもペンタゴンの前にはありません。」――

ペンタゴンの壁が崩壊したのは、飛行機が追突してから40分後です。39分。

――「質問。ボーイング757型機が2.7メートルの鉄筋コンクリートを貫通して何も残骸を残さずに、4.2から4.8メートルの穴をあけるなどということができるでしょうか。……」――

（ビデオ終了）

最後までお見せしたいところですが、私の話はもう時間が来てしまったのでこれで終わります。私が一番言いたいことというのは、戦争をしている国、戦争をしようとしている国のメディアが本当のことを伝えないということです。そのときに、では私たち市民はどうすればいいかというのですけれども、大手メディア以外の情報源を持つということです。

その一つに自分たちがなれればいいなと思って私たちはグローバルピースキャンペーンという名前でインターネットでニュースを配信しています。来月からは私個人のきくちゆみの地球平和ニュースという名前で無料でメールマガジンを発行しますので、よろしかったらそちらにも登録してみてください。そうしますとニュースで見ていることと実際に起こっていることと、二つ情報源を持って、あとはご自分で判断されたらいいと思うんですけれども、戦争の方に自分が加担しないように、そして戦争に向かっているなと思ったら、それを平和の方に戻すのに一人ひとりどんなことができるのかということを考えたり、あるいは発信したり皆さんもしてほしいというふうに思います。

それでは、本当に長い間どうもありがとうございました。（拍手）

○司会　きくちゆみさん、本当にありがとうございました。

大変なメッセージをちょうだいしました。大変時間が長くなっております。

今から10分間の休憩に入りたいと思います。もうお書きになっている方もいらっしゃるようなのですが、この10分間で質問等お書きいただいて、前のアンケート箱、あそこにありますので、どうぞそちらに申し訳ございませんが入れていただければというふうに思います。

10分後、今3時42分ですので、52分に始めたいと思います。

お疲れさまでした。

（休憩）

○司会　大変お待たせいたしました。第2部の開演です。

皆様からたくさんの質問をちょうだいいたしました。これから交流トークに入りたいと思います。

本日3人のご講師の方がご登壇いただいております。

コーディネーターは、我孫子市市長福嶋浩彦が担います。よろしくお願いします。

○福嶋市長　3人の皆さん、ありがとうございました。

また、会場の皆さんも長時間の講演になりましたけれども、本当にお付き合いをいただきましてありがとうございます。今、皆さんからこんなにいっぱい質問をいただきました。これを整理して質問せよというのが指示なんですけれども、とても膨大な質問を整理してこの時間内にお聞きすることは無理なので、ちょっと目についたものから、ぶっつけ本番でお聞きしてお答えをしていただきたいと思いますのでよろしくお願いをいたします。

まず、きくちゆみさんと郡山さん両方に質問なんですけれども、きょうの講演でイラクだけではなくて戦争について知ることができたということで、今回の講演のように各方面からいろいろな見方で戦争について考えられたことはとても有意義だと思う。知るということはまず1歩だと思います。市民として第2歩目はなんだと思いますかと、非常に難しい質問ですけれども、よろしいでしょうか。

では、きくちさんからお願いいたします。

○きくち　私は2歩目はお金の流れを変えるということをいつも言っています。

今、アメリカの戦争が一番多いですよね、この世の中では。そのアメリカという国はものすごく大きな赤字を抱えていて、国の税金では賄えないふうになっています。ですから、米国債という債券を発行して、それによって戦争の費用、イラクの戦争の費用なんかも調達しています。今その米国債を一番買っている国が日本なんですね。ですから、そういうことをしている限りはアメリカの戦争を日本の私たちがファイナンスするという変なことになっています。

皆さんがもし本当に戦争を止めたいと思うのだったら、その貯金なんですけれども、お金を平和に投資しなくてはいけないと思います。では平和に投資するとは具体的に何なのだろうと思いますけれども、私が一番お勧めしているのは、自然エネルギーに投資してはどうだろうかという提案をさせてもらっています。というのは、このイラクの戦争、アフガニスタンの戦争どちらもエネルギーとすごく密接な関係があります。アフガニスタンはパイプラインをどうしても通したかった。天然ガスと石油ですね、そしてイラクは、もちろん石油の埋蔵量が世界第2位です。そういうことで、やはりエネルギーをおさえた人が世界の経済的な覇権を握るというのとものすごく関係があります。私たち日本人はすごくエネルギーが乏しいですよね。ですから、自分たちの風力発電とか太陽光とかバイオマスとか、いろいろな新しいテクノロジーの自然のエネルギーに自分たちで投資してみてはどうだろうかという提案をしています。実際そういう動きは各地で始まっていて、自然エネルギー市民ファンドという会社もできました。覚えていてください、自然エネルギー市民ファンド。これはＵＲＬがwww.greenfund.jpです。ここに行きますと、自分たちで投資をしたお金で風力発電をつくったり、太陽光発電をつくって、もし発電をしたらその後配当

金をもらえるような、そういう仕組みになっていて非常に面白い新しい経済、市民経済のつくり方というのかしら、そして同時に平和をつくっていくことにつながると思っているので、そういう提案を第2歩目としてさせてもらっています。

○福嶋市長　ありがとうございました。それではお願いいたします。

○郡山　僕はきくちさんみたいにそういう具体的な提示ができないのですが、でもすごくいつも、多く、よく聞かれる質問です。僕は知ることが第1歩というふうに言われましたけれども、僕の大好きなＮＧＯの方でイケマさんという方がいらっしゃるのですけれども、その方の一言が、一番大切なボランティアこそ知ることだというふうな言葉があります。僕はいつも役割分担という言葉を使うんですね。例えばこちらにいるお二方は自分たちの立場で自分たちのできることをやっているわけです。皆さんもそういうことが一人ひとり多分違うと思うんですね。きょう見たこと知ったことというのを、受けとめ方も多分百人百様だと思います。だから、できることも全部違ってくると思うんですね。ですから、僕はただ、こういうことをやっていますので、海外にどんどん出て行って現場に立って取材することができますのでそれを伝えることができますけれども、僕にできないことが皆さんにはたくさんできるのだというふうに思っています。ですから、できることから、自分がいいと思うことからやっていけばいいのではないかなというふうに思います。

身近なところでいきますと、僕は九州出身なんですけれども、大酒飲みが多いのですが、僕の友人もそうです。でも毎日の晩酌を週2回にしまして、残りをビール飲んだと思ったつもりで貯金して、それを寄附しているうちに自分のうちがイラクピースキャンペーンとかいうＮＧＯになってしまったというやつがいるんですけれども。そういう感じでできることからやっていけばいいというふうに思います。

だから、ちょっと提示というのはできません。僕は自分でできることをやっているつもりですし、僕の大好きなアメリカのジェームス・ナクトウエイという写真家がおりますけれども、彼が僕がカメラを持って現場に立つということは、平和活動の一環であるという言葉を言っていますけれども、僕もそういうつもりで現場に立っておりますので、できることをやっているまでです。皆さんも、是非やってください。

○福嶋市長　はい、ありがとうございます。

ちょっとこう、整理しながらでなくてもどんどんいきたいと思います。

今度は松村さんへの質問なんですけれども、行ってサマワが安全が確保されているという中で、民間でもできることはあるだろうと。自衛隊でなければできないこともある、その辺の区分けと言いますか、現地におられて実際にどう感じられたかという質問なんですけれども。

○松村　実際私たちイラクに自衛隊を派遣すると最初に決まったころは、最終的にはイラクの治安がだんだん落ち着いていって、そのイラクの治安が落ち着いてくれば武器をもっ

た自衛隊ではなくて、もっとＮＧＯの方とか、あるいはＯＤＡも、ＯＤＡというのは、ただ単にお金を現地の政府にあげて何かをつくれというのではなくて、実際に現地で役に立つプロジェクトというのを外務省の方とかあるいはジャイカの方が現地に行って選定をして、そのプロジェクトを実際に現地の役に立つように、浄水場なら浄水場、発電所なら発電所がちゃんと運営できるようにその体制を整えて、しかもその工事をやっているときには施工管理をして、ちゃんとした現地のインフラとして機能させるというところまで面倒を見るということでＯＤＡをやるわけですから、ＯＤＡを実際にやるときにはアフリカでやっているＯＤＡでも東南アジアでも、数多くの日本の政府の職員やジャイカの職員やあるいは請け負った民間企業の人たちが入っていって実際、成立するんですね。そういうＯＤＡというのも実際には民間の人たちがいっぱいかかわるのですけれども、そういうものがだんだんできるようになってそこに引き継いでいくというイメージでいて、今もそういうイメージでいるんですけれども、なかなかその治安のところが回復してこない。先ほどもきくちさんともお話をしていたときに、あれは銃をもたないでいってできればいいですよねというお話があって、全くその通りなんですけれども、実際には現地の社会というのは、サマワの地域は安定しておりますけれども、ファルージャとかああいうところではああいう戦闘に近い状態があって、その中で実際テロリストがサマワにも入ってきて、かなり政治的なアピールという面も強いのですけれども、そこで自衛隊に対してもいろいろ攻撃のようなことを加えるということがある中で、最低限自分たちの身を守るというようなことで、それをしっかりと抑止をしながら活動するということしか今できない状態でいる。また、テロリストだけではなくて治安もかなり悪い状態がありまして、やはり現地の社会、子供たちはいつも普通に学校に通学していて、一見普通の通学風景みたいに見えるのですけれども、それでも子供たちが誘拐されて今、社会が先ほど申し上げたように本当に何でもありの世界になってしまっていますので、治安もしっかり維持されていないという中で、子供たちが誘拐されて身代金を要求されたりというような事案もいっぱい起きているために、地元の方たちが子供たちの通学路に、日本ですとお母さんが黄色い旗を持って、交通事故が起きないように立つんですけれども、サマワの町ではお父さんたちが交代で銃を持って子供たちの通学路の安全を確保するために立っている。そういうような状況がありまして、そういう中ではなかなか、丸腰で民間の方が行って逆に被害に遭われるというようなことがありますと、日本としての支援というのはそこでまた止まってしまいますから、そういうことが起きないような態勢を取ったような自衛隊しか今できないという状況になっています。ですからこれが、本当にまず治安が回復するというのが第1で、それから復興が始まるのではないかなというふうに思っております。

○福嶋市長　はい、ありがとうございます。もう一つ続いて、松村さんにもう一つだけ質問が来ています。質問はいっぱい来ているのですが、もう一つだけお聞きすると、これは

単純な話なんですが、映像を見ていて、あまり迷彩服は似合わなかったのではないか。もうちょっと服装を考えたらどうだったのかなというご質問というかご意見がありますけれども。それについてはいかがでしょうか。

○松村　そうですね。やはり、あくまでも自衛隊が行っているという、自衛隊というのは軍事組織なんですよ、やはり。純然たる復興支援を全く丸腰でできるならば、自衛隊が行く必要は逆にないわけでありまして、自衛隊が武器を持って、実際私たちは最後の手段としてしか使わないという訓練を隊員に徹底的にしていますから、軽々に地元の方たちを傷つけるようなことはないというふうに確信しておりますけれども、その最終的には、もし悪意を抱く勢力がこの自衛隊に対して何らかの攻撃を仕掛けてきたときには、反撃されるという、そういう抑止力があるからこそ、あそこで存在して復興支援活動もできるというふうに思っております。そういう意味で武器を持っていること、それから迷彩服を着て軍事組織として活動していることというのは、そういう抑止力の現われだというふうに私たちは考えております。

○福嶋市長　ありがとうございました。

それでは、郡山さんへの質問なんですけれども、子供たちが犠牲になった映像がたくさんあったんですけれども、その親は何をやっていたのだろうかという質問があるんですね。ちょっとこの質問の意味は、親はもしかしたら軍人なのかという意味なのか、子供たちが犠牲になったとき、親は現場で何をやっていたのかという意味なのか、ちょっと、会場とやりとりをやっているとあまり時間がないので、どちらでしょうか。

○会場から　子供たちが、ああいうことをやっている、危ないのはわかっている。だったら親がそれを止めるようにしているのは当然ではないか。親は何をしているんだと。

○福嶋市長　わかりました。ありがとうございました。

○会場から　・・・・・・、全部そうなんだ。ファルージャのもそうなんですよ。女や子供、悲惨な絵が出ましたよね。では、あのとき、あの子供たちの親は何をしているんだと。あのときに、閉じ込められたときに、避難させろということを攻撃の司令官に対して具申して、避難させろということをやったのかどうか。それも両方撮らないと、あなた方の言うことを聞いていると、アメリカが悪いアメリカが悪いということばかりで、そんなアメリカ・・・・・・、けんか両成敗なんですから、両方悪いのだから、・・・・・・という悲惨なことになるわけです。

○福嶋市長　はい、ありがとうございます。会場からご意見いただきたいところなんですが、ちょっときょうは大変申し訳ありません、よろしくお願いいたします。

○郡山　では、ファルージャのことからお答えします。

それはもう、徹底して命をかけて皆、親がやりました。泣いてすがりました。でも、逃がしてくれないんです。帰れと。戻れと。で、攻撃が始まるわけです。インディファーダ

ーに関しては、あれは親も止めています。でも、自分たちの今後のことにかかわっているんだからということで、子供たちが自主的にやっているだけなんですね。中にはそういうことで要するに、注目を集めたいわけですよ。自分たちの国が今どういう状況に置かれているかということを、世界に発信する術が彼らはないんですね。ですから命をかけてああいうことをやっているわけで、親はもちろん止めていますし、親はすごく泣きじゃくっています。亡くなった子の遺体にすがって。僕は、死んだ子の内臓をつかんで見ろと、世界、これがここの現実だと、カメラに向けられたこともあります。そんな中でやはり彼らは彼らなりに考えて悩んでやっているわけです。親も皆命がけでやっているんですね。でもそれが世界の関心を引かないだけなんです、全然。全く。

○会場から　世界の関心を引くために自分の子を殺して

○郡山　だから、殺しているのは、イスラエル側ですよ。イスラエル側についていて、後ろだてしているのはアメリカです。

○会場から　アメリカも・・・だからお互いではないか。

○郡山　お互いではないですよ、もともとパレスチナ人が住んでいるところに1948年、ユダヤ人が入植地と言って虐殺を行って自分たちの家にしてしまったんです。

○福嶋市長　ありがとうございます、申し訳ありませんが、ちょっと先に進ませていただきます。

○郡山　後でお話しましょう。（拍手）

○福嶋市長　あとは、きくちさんへの質問なんですけれども、これは既にお話の中でもあったことなのかもしれませんけれども、ご質問では友人がイラクに10年間住んでいたんですけれども、サダム・フセインについてどう思うかと聞くと、外国のマスコミで流れているようなイメージではないという答えが返ってきたということをふまえて、質問自体は、イラク戦争というのはテロの制圧だったのか、宗教戦争だったのか、資源戦争だったのか、人権のための戦争だったのか、何だと思われますかという質問がきています。

○きくち　私はやはり資源というのが一番大きいと思います。というのは、ダウニングメモというのが、日本では報道されたのでしょうか、ダウニングストリートメモというイギリスのダウニングストリートという場所があるのですけれども、そこで秘密のメモがイギリスのメディアでは公表されたんですが、そこに何が書いてあったかというと、イギリスの首相とM16というその諜報機関のトップとそこの部員がイラク戦争の前に交わした、あるメモが書いてあります。その中に、この911事件のずっと前、半年から10カ月くらい前に交わしたメモの中に、イラク攻撃はもうやらなくてはいけないんだ、アメリカは決めているので、わが国にはそれに参加するしかないんだというやりとりがされている。そう考えると、私が言った三つの理由ですね、911事件のため、対テロ戦争のための戦争だったですね、最初は。それから大量破壊兵器になり、そして最後にイラク人の独裁者からの解

放というふうに3回理由が変わったという、きょうお話しましたけれども、そういうのと全く関係ないところで、この戦争と言う、戦争とも言えないですね、侵略の決定がされていたということは、イギリスの新聞、それからテレビで既に報道されています。残念ながら、日本のメディアでダウニングストリートメモのことを、私あまり見ていないんですけれども、見た人はいますか。日本のメディアで。やっていたよ、それやっていたよという人がもし、いたら。

見ていました。どこの新聞社で。

○会場から　世界という雑誌です。

○きくち　世界という雑誌でね。はいはい。

世界とか金曜日とかいう雑誌は、マスコミには入らないと言っては失礼ですけれども、あまりたくさんの方が読んでいないので、ほとんどの方が知らないと思うんです。そういう意味では報道されていない事実がまだまだいっぱいあります。特にイラクに関しては、やはり資源戦争の性格が一番強いと、私は思っています。

○福嶋市長　はい、ありがとうございます。

実は、こういう質問はしないという打ち合わせになっていたのですが、やはりちょっと3人の方、前にしてみますと、どうしても聞きたくなったので質問させていただくんですけれども、難しい話ではなくて、それぞれ3人の方、お話いただいて、いろいろな所で講演活動はされていますけれども、恐らくこういうメンバーで講演をされたのは初めてではないかと思うんですよね。それで、あとお二人の方のお話を聞いて、何か感じられたことなどありましたら、お一人ずつちょっと話をしていただけたらなと思うんですけれども。

郡山さんからでよろしいですか。

○郡山　きくちゆみさんは以前から知っているので、あれなんですけれども、改めてあのビデオが欲しいなというのがちょっとありました。戦争中毒は持っているんですけれども。

松村さんのお話は、今までなかなか自衛隊のことが、今全くメディアに出ないようになっていますから、それを生で行かれた方のお話を聞くというのはすごく新鮮でした。正直、僕は一番楽しみだったのは、これだったんです。でも、いろいろな立場の人の意見を聞くのはすごく大事なことで、僕はこれは我孫子市長さんがすごく偉いと思うんですけれども、そうなってこそ、初めて同じ土俵に上るんですよ。初めてコミュニケーションが取れるんです、これで。だから、これこそ僕は広がっていくのではないか、こういうやり方こそというふうに思います。

お互いがお互いに自分の主張を話すと、皆さんの前で。皆さんに問題提起をするわけですね。その中でどう受けとめていくかというのはやはり、両方のいろいろな角度から、物を見ていく必要がありますので、すごく僕自身が勉強になりました。ありがとうございました。（拍手）

○福嶋市長　ありがとうございました。では続いて松村さん、よろしいでしょうか。
○松村　私はきょうのような機会を与えていただいて、本当に私自身もいろいろ勉強になったんですけれども、確かに郡山さんがおっしゃることもきくちさんがおっしゃることも、そこの筋の中ではその一つの真実をとらえたお話をされていると思うんですけれども、なかなか私としては物事そう単純ではないよというところが、どうしても思ってしまうんです。私も実際先ほどちょっと経歴でも紹介がありましたけれども、アメリカの陸軍戦略大学というところに留学していまして、アメリカの軍人のしかも、大佐クラスの、何百人、何千人という米軍の軍人を指揮している人たちというのをいっぱい知っている。友人にいるんです。けれども、本当に彼らというのは人一倍ほかの人たちよりも正義感というのがものすごく強い人たちで、それは確かに軍隊というのはある戦場の中で残虐なことをするということもあるんですけれども、本当に今のアメリカの軍人の、軍を指揮している人たちというのは本当に地域社会ではボランティア活動を一所懸命やって、人間的にすばらしい人たちばかりなんですよね。それで人一倍正義感に燃えていて、自由と民主主義を世界に体現するんだと、そういう意識でやっていると。

そういう話をすると、ではそういう人たちというのは上の方にだまされているのではないかと。ブッシュとかそういうレベルではもっと違うことを考えていて、そういう人たちの善意が利用されているんのではないかというふうに思われる。あるいはそういう反応を受けると思うんですけれども、そうでもないと思うんです。それはかなり政府のトップレベルの人たちでも本当に自由と民主主義を体現するために世界のいろいろなことに関与しようと。実際にフセイン政権にしても、ノリエガ、さっきのパナマのノリエガ政権にしても彼らの自分たちの国民に対して虐殺をしたり、あるいは麻薬の密輸をしたりということで、本当にひどいことを実際にやっているわけで、それに対する怒りというのもやはりある。国民の中にもあるし、アメリカにもあると。それをなんとかしようという、そういう考えというのはやはりあるわけです。

そこで、ある意味ではもっとこわいのは、国民が、郡山さんやきくちさんのように、本当にそれに対してしっかりと目を向けて、世界で今起きていることに目を向けて、これをなんとかしよう、政府は政府レベルでもなんとかしよう、というのを皆考えているわけです。こわいのはなんとかしようというのがなくなって、本当にヨーロッパとかアメリカとか日本の豊かな社会は、自分たちは豊かなんだから、今アフリカで起きている飢餓とか内戦とか、こういうことには無関心でいいやというふうに政府もあるいは市民も皆その自分の世界で起きていること以外に興味を持たなくなってしまうと、世界が本当に豊かな世界と、取り残された貧困と飢餓の中で苦しむ人たちばかりの世界と、世界が二つに、二分してしまうというのが一番怖いわけです。ですからアメリカでもよく、アメリカが内向きになってしまって、世界のことに全く関心を払わなくなったら、それは怖いというようなこ

とも言われるわけですけれども、そういう面では政権のトップの人たちも市民活動をやっている人たちも、皆世界のことに目を向けているという点では逆にポジティブな共通な面があるなと。ちょっと逆説的な話ですけれども、そういうことをきょう感じました。（拍手）

○福嶋市長　ありがとうございました。では、きくちさん、お願いします。

○きくち　はい、私もきょう一番楽しみにしていたのは、松村さんとお会いしてこうやって話をすることです。やっぱり、私なんかは市民グループに呼んでもらってお話する機会が一番多いんですけれども、意見や立場の違う人が一緒にこうやって場をともにして、話し合う機会というのはなかなかないですよね。そういう意味ではこういったチャンスをつくってもらった福嶋市長に本当に感謝しています。ありがとうございます。（拍手）

我孫子の市民の方は、だから本当にラッキーですね。こういう市長はいないですよ。日本中探しても、なかなかいないです。

話を聞いた感想ですけれども、自衛隊、軍隊が皆自衛隊みたいだったらいいなと。本当は軍隊ではなかったらもっといいなと。先ほど舞台裏で、あれは武器なしではできないのですかと何回か松村さんに言ったんですけれども、今の現状では無理ですねというお話でしたけれども、軍隊というのではなくて、本当に人を助けに行くという気持ちを持って兵隊がよその国に入っていく。ではそれは兵隊である必要があるんだろうか、武器がいるんだろうか。ということにだんだんなっていくと思うんですけれども、今の現状では仕方がないという話ですが、理想的にはやはり、今、異常にたくさんのお金と資源と頭脳が戦争のために使われているという現状があります。武器のため、軍事費というのは今1兆ドルを超えていますよ。このお金を本当に貧困の解決、環境問題の解決、それから教育とか福祉とかに回したらどんな世界になるんでしょうね。そういう世界をつくっていくリーダーに日本がなっていったらいい。憲法9条を持っている日本がそういうことのリーダーになっていったらいいと強く思います。（拍手）

○福嶋市長　ありがとうございました。

お3人の話を聞いていて、パネルディスカッションでもできたかなと思いました。

これはパネルディスカッションではないんですね。3人の方に登壇していただいて、皆さんからの質問を私を通して伝えるという企画なんですけれども、この平和事業、私や行政だけがやっているのではなくて、市民の実行委員会の皆さんと取り組んでいるんですけれども、市民の皆さんとも一緒に話していて、ちょっとパネルディスカッションまでは成立させるのは難しいかなという思いがありまして、それでこういう形にしたんですけれども、あまりそういう心配をすることなくて、パネルディスカッションでもできたかなと思いますので、またそんな企画もぜひやってみたいと思います。（拍手）ありがとうございます。

それでは、もう時間はとっくに過ぎておりまして、あと1問ずつくらいしかちょっと無

理かと思いますけれども、では松村さんへのご質問で。

私も感じたんですが、映像で、松村さんに見せていただいたサマワの映像と、お二人の方の映像とものすごく違って、とても同じ国だとは思えないような映像だったと思うんですね。それは、場所も、多少時期も違うということももちろんあったでしょうけれども、サマワの中でああいう子供たちがいないのか、そういう場面はなかったのかというお話と、それからすばらしい活動をされてきたわけですけれども、失敗談もできたら聞かせていただきたいという質問が来ているんですが。いかがでしょうか。

○松村　まず、一つ目の方の質問に対する答えですけれども、先ほど話の中でも少しふれたんですけれども、南東部の地域というのはとても治安がいいということで、本当に戦闘状態というかそういうものが全くなくて、テロリストの活動が全くないわけではないんですけれども、それも日本でも防衛庁に手作りの迫撃弾が撃ちこまれたりとかは、実際にイラクに派遣されるころはあったんですけれども、それと同じで、警察がそこを捜索してすぐにつかまえる態勢になっています。それはイラクの警察ですね、イラクの現地の警察はそういう形になっていますので、日本における過激派の活動と同じで、市民生活はふつうに行われていて、そこでそういう犯罪的にテロが起きるということなので、ファルージャ等で見られるようなああいう戦闘の中で市民が巻き込まれるというような状況は全くなかったんです。その背景というのは、本当にサマワの市民の人たちと話してみると、やはりフセイン政権に対する憎しみというのがものすごく強いんですよ。それは実際、自分の肉親を誰か殺された、親戚が殺されたという人がほとんどで、フセイン時代に数十万から数百万の人たちが、正確にはこれ、数がカウントされていないわけですけれども、フセイン政権によって虐殺されて、クルド人の地域では化学兵器も使われていると。だからと言って私は別にアメリカがやっていることを全部正当化しようとは思いませんけれども、ただ、実際そういう感情が南東部の人たち、シーア派の人たちにはあって、ですからアメリカがやっていること、多国籍軍がやっていることに対して多少の反発はあっても、やはりそれ以上にフセイン政権に対する憎しみというのが強い。それが今終わって、自分たちが自分たちの国をつくれるという思いが強いということは、自衛隊なりほかの、南東部は実は米軍がいなくて、イギリス軍と今、オーストラリア軍がサマワにいるんですけれども、こういう軍に対する思いになっている。それを受けとめて、イギリス軍やオーストラリア軍も決して現地の人たちに銃を向けるというのは、最後の自分たちが攻撃されたときだけであって、それ以外では、例えば、つい先週もオーストラリア軍の装甲車がサマワの中でロケット弾で攻撃されるという事案がありましたけれども、オーストラリアの兵隊たちはそれに対して撃ち返さなかったんですね。上に向けて、警告射撃をしただけで、やはりもし撃っている人間を撃ち返したときには、周りにもイラクの別の無実の人がいるかもしれない。そういう人たちに当たってしまっては困るからということで、撃ち返さなかったというよ

うなこともありますけれども、そういうことにも気をつけながら、本当に犯罪者だけを取り締まるようなことを気をつけながら、南東ではイギリス・オーストラリア・日本という軍がやっているというような状況であります。

あと、失敗談ということですけれども、失敗いっぱいあるんですけれども、そうですね。

これ私がいたときではないんですが、現地ではやはりイスラム社会ですから男性と女性、子供であってもやはり女の子に対するときにはすごく気をつけなくてはいけなくて、現地の方たちが、先ほど私の映像の中でもあったのですけれども、日本の人たちありがとうということで、自衛隊の宿営地に来てくれるんですよね。それで、1回その女の子が自衛隊の宿営地の中で向こうのダンスを披露してくれたのを、逆にそれに反対する勢力がそのダンスを映した映像を地元のテレビ局から入手をして、日本人はこうやってイラクの女の子を呼んでダンスをさせて楽しんでいるんだと、こんなことしているので、復興支援なんかやっていないんだという、そういう反対の宣伝の方に使われてしまったというようなことがあって、そういう文化的な面というのは、すごく気をつけなければいけないなということを感じました。

○福嶋市長　はい、ありがとうございました。

それでは、きくちさんへの質問なんですけれども、世界的に活躍されていて、ものすごく大きな意義があると思うんですが、やはり国内でこの活動をぜひ、同世代の、同世代というときっと若い世代という意味だと思いますが、若い人たちに広げていってほしいと思うんだけれども、この日本で運動を広げていく上で、ぶつかっておられる壁とか、困難さみたいなものはありますかという質問です。

○きくち　9月11日以降、2001年から今日までのほとんどの土日は、私はこうやって誰かの前でお話をしています。一日も休みがないくらい日本国内で話をしています。そういう意味ではものすごく広がっているというのが、広がっていると言っても、自分の話を直接聞いてくださった方だけであって、講演会と言っても50人くらいの小さな会もありますので、そんな日本中の中からの、ほんの数パーセントにも満たない小さなグループだと思いますが、関心はすごく高まっています。それから、若い人たちへということなんですけれども、実は2002年から東京平和映画祭という、こういった商業映画にはのらないドキュメンタリー映画作品を集めた映画祭をやっています。代々木のオリンピックセンターというところで朝から晩まで6本くらいの映画をザーッと見て、監督を全員呼んで、監督とお昼を食べたりとか、そういう楽しい映画祭をやっているんですが、それには1,000人くらいの人が来るんですけれども、ほぼ半数以上若者ですね。私が見たところ。非常に若い世代が多くて、実は今年は3回目になるんですが、東京平和映画祭フォーユースということで、若い人向けにものすごく安い値段で11月26日にまたこの映画祭をやります。こういうところに非常に20代30代、あるいは10代の人たちが来てくれているので、私の周り、私自身の

直感としては若い人は関心がないわけではない、実際に、それで若い人というのは、こういうのにふれたときに、行動に移すのが早いですよね、年配の人と、人にもよるんでしょうけれども。すぐアクションに移して、次のアクションというふうにどんどん自分たちで動いていく方が多いので、私自身は大きな手ごたえを感じていて、今のところ大きな壁というのが、もしあるとすれば日本のメディアの方ですね。大手メディアがもうちょっとこういう動きを取り上げてくれたらもっと広がるのになというのが、壁と言えば壁です。

○福嶋市長　ありがとうございました。

それでは、郡山さんへのご質問なんですけれども、ちょっと話されたあのパレスチナと沖縄の共通性をすごく感じたとおっしゃって、その点についてもう少しお話を聞きたいという質問が来ています。

○郡山　検問所の雰囲気が、そっくりですね。基地の中の沖縄とよく言われますけれども、何だろう。本当にパレスチナ自治区と、ユダヤ人の入植地というのは、もうそこを通り過ぎた瞬間に世界は変わるんですよ。貧富の差はものすごいですね。3分の1ぐらいの生活費で生活しなければならないんです、パレスチナ人たちは。失業率も60％以上です。そんな中で動きを制限されて、検問所で尋問を受けている姿と、すごい一等地にドンと基地を置かれてその柵の横を避けるようにして道路が走っているというその状態を見て、すごく僕はかぶったんですね、そういう状態が。自分の土地なのに、だから先ほどお話しましたけれども、1948年まであそこはパレスチナ人が住んでいた場所でした。それをヨーロッパの一部の国がユダヤ人たちに土地を与えようということでそこに入植を許したわけです。で、ユダヤ人たちがば一っと入ってきて、もともとあったパレスチナ人たちの住民を追い出して、自分たちが住み始めてからああいう状態になったんですね。圧倒的武力で抑えつけて、もう全く反論できないような状態にして、あのような今の石で抵抗するみたいなこととかになっているわけです。自爆攻撃なんかもあそこから始まったことなんですけれども、先ほどもちらっと話しましたけれども、その投石している子供の親はという話がありましたが、親が殺されて、おれは何かしたいんだという子もたくさんいました。個人的恨みが本当にすごいんです。憎しみしか生まれないんですね。それがどんどん連鎖していくわけです。ですから、本当に、僕はとにかく人が死ぬのがいやなんですね。もう見たくないんですよ。僕だって遺体なんか撮りたくはないし、その人が人を撃っている現場なんか撮りたくないですよ。せっかく日本に生まれたんだから、きれいな桜を撮りたいですよ、僕だって。でも、そういう、僕らが、きくちさんが今忙しいとおっしゃいましたが、僕も取材とこういう講演活動とかに呼んでいただいたり、あと執筆とかでばたばたしておりますけれども、僕らが忙しいってこの世の中、すごくおかしいんですよね、そもそも。

僕は廃業したいんです、早く。そのためにも現場に立ち続けて、彼らの声を伝えなければならないんです。知った責任があるんです、僕には。現場でこの声を伝えてくれと。何

とかしてくれと。死んでしまうよ、このままではという声を背負っていつも帰ってきます。

ですから、講演の冒頭でも話しましたけれども、こういう機会を与えてくださることは大変ありがたいことです。だって、ようやく知ってもらえたからと言えるわけですから。だからすごくありがたいわけです。だから、廃業するためにも現場に立ち続けるんです、僕は。

よく勘違いされるんです、ではやめろよと言われるけれども、これはかかわった者の責任です。と僕は思って、きょうお話させてもらった国というのは、もう数回どこも通っている現場です。もう友人もいるし、愛着もあります。かかわっているから、彼はどうしているかなとか、いろいろなことが気になります。今、イラクがなかなか入れない状況にあっても、僕はイラク人の友人に家族がいるんですよ。すごいよくしてもらった家族がいるんです。彼らが仏教にすごい興味があるから、仏教を英語で書いた本を持って来てくれと言って探して持っているんですけれども、なかなか持っていくことができません。ですから、そういうのもありまして…。

すごく話が飛んでしまいましたが、とにかくかかわっているんです、すべてのことに。日本人も日本もほかの国も。全部です。貧困とか戦争は急に始まるものではありません。貧困だって、人災です。飢餓も人災です。搾取とかそういうものから起こるんです。それから戦争が始まるんです。

資本主義の国とか、いろいろな大きな国が入ってきて、そこから石油を吸い上げていく。でも周りの人間には全く回ってこない。そういう人たちがどんどん土地を汚されていって、なんで俺たちの土地にああいう連中がいるんだと。なんで俺たちがこんなに貧困な生活をしなければいけないんだと立ち上がった人間を僕らはテロリストとかゲリラとか言っているんですよ。

済みません、怒ってしまいました。ごめんなさい。（拍手）

○福嶋市長　どうもありがとうございました。それでは残念ですけれども、もう時間を大幅に超過していますので、以上にさせていただきたいと思います。こんなに皆さんから質問をもらったんですけれども、全くちゃんと整理して質問できたとは思っていません。正直申し上げて、簡単に書いていただいた質問を取り上げました。とても長文の質問を読んでいる時間はありませんでした。整理できませんでしたので、簡単に書いていただいた方を中心にやりましたけれども、せっかくいただいた質問ですので、今、我孫子市でこの平和事業の中で平和の記念誌をつくっているんですね。その中にこの質問も載せさせていただいて、そして、一つひとつの質問に、一問一答という形ではないとしても、3人の講師の方からもまた質問を全体的に読んでいただいた上でのコメントも載せて、文集にしていきたいと思いますので、またそちらもお読みいただけたらと思います。（拍手）ありがとうございます。

きょう、3人の方からお話いただいたこと、また映像で見せていただいたこと、とても重たい現実で、簡単に私たちが整理できたり、消化できたりする問題ではないと思うんですね。

でもこれからも、最初に言いましたように、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、知ること、そして自分の頭でどうすればいいか考えていくことをひろげていきたいなと思っています。

本当に、報復と憎しみの連鎖が新しい暴力や犠牲者を生むということをなんとか、皆で止めていけたらなと思っておりますので、これからもどうぞよろしくお願いします。

3人の皆さんに、もう一度拍手をよろしくお願いします。（拍手）

どうもありがとうございました。

○司会　本日はありがとうございました。

コーディネーター役、市長、お疲れさまでした。

皆様、もう一度お3人のご活躍に御盛大なる拍手をお願いします。

本当に長時間にわたり、ありがとうございました。

文責　我孫子市企画調整担当

○講演者に対する質問の要旨一覧（会場での回答済みを含む）

参考　№：整理番号、性：質問者の性別、年：質問者の年齢、講師名：質問対象の講師名

№	性	年	講師名	質　問　要　旨
1	女	73	松村	自衛隊の広報活動をどう変えたら良いか。
2	男	62	松村	世界中で破壊的テロが横行しています。武力だけでテロは無くせないと思います。平和な世界を作る考えをお聞かせください。
3	男	65	松村 きくち	憲法改正論議が盛んになっていますが、どうお考えでしょうか。
4	女	44	松村	・何に対して不満を持って、テロを起こしているのか知りたい。 ・サマーワ現地で、嫌な思いをしたことはありますか。
5	？	？	松村	平和なサマーワでは、自衛隊ではなく民間人の方が、より効果的でないかと思いますが、どうでしょうか？
6	女		郡山	沖縄とパレスチナが、かぶさって感じられたという内容を、もう少し具体的に教えてください。
7	女	58	松村	ペシャワール会の中村哲氏が、アフガニスタンで「憲法９条に守られている事実」「丸腰でいる強さ」を実感したそうです。サマーワではどう感じられましたか？
8	男	67	松村	来年５月に英国軍、豪州軍がサマーワから撤退したら、自衛隊の活動を継続することは可能ですか？どの程度の制約を受けると考えられますか？
9	男	61	松村	支援で、「迷彩服」を着ているのは現状に合わないように思います。支援の現場では、別の服を着たほうが現地の人の感情にも合うと思いますが、どうでしょうか。
10	女	26	郡山 松村 きくち	戦争について知ること、これは第１歩だと思いますが、一般市民としてできること、第２歩は何だと思いますか？
11	男	64	きくち	イラク戦争は何のための戦争だったのだろうか。テロの制圧なのか、宗教戦争なのか、資源戦争なのか、人権回復戦争なのか
12			松村	・憲法９条が改定され、自衛隊が軍隊となった場合、復興支援に変化はありますか？ ・イラクの治安の悪さ、復興が進んでいない様子がTVで見られる。イラクを平和な国にするため、何が必要だと思いますか。

№	性	年	講師名	質　問　要　旨
13	女	32	松村	・「頭脳」から誤った指令が出された時、「手足」として働く自衛隊は、苦悩や葛藤などを感じることはないのでしょうか？ ・多数意見が必ずしも正しいと限りません。少数の意見に耳を傾けることもとても大切と思いますが、どう思われますか？
14	女	63	郡山 松村 きくち	復興よりも、戦争を起こさない努力が先決だと思います。アメリカのイラク戦争をどう思われますか？また、世界はどうしてこれを止められなかったのだと思われますか？
15			郡山	自衛隊の松村さんの講演を、どの様な気持ちで聞かれましたか？皆ニコニコした笑顔ばかりの映像には、何か疑問を感じました。
16	男	39	松村	・自衛隊の本務は後方支援であって、「前線部隊」に対する支援が主ではないですか？ ・自衛隊の活動は、日本の国益に適うと考えますか？
17	女	69	松村	イラク現地での支援活動は、どれくらいの期間必要と考えますか？
			きくち	もっと国内で幅広く、特に同世代への人々にキャンペーン活動を期待しますが、活動上障害がありますか？
18	男	53	松村	安全なサマワに、武装した自衛隊が支援に行く意味が分かりません。お話の様な支援なら、民間人に任せるべきと思いますが。
19	女	33	郡山 きくち	国が利益追求のために軍事行動をベストと考え実行する時、平和団体は何故、軍事行動でない代替案を出せないのでしょうか？
			松村	イラク駐留初めに、サマワの部族に羊を配ったら、招かれざる部族が現れ、羊を要求したと聞きますが、どう対処しましたか？
20	男	66	松村	自衛隊はいつまでイラク支援を続けるべきだと思いますか？
21	男	70	郡山	子供がイスラエル軍に投石していた写真がありましたが、この時、親は何をしていたのでしょうか？
22	女	40	きくち 郡山	憲法９条を改憲する動きに拍車がかかっており、同条第２項は現実と矛盾していると考えている政治家や国民がいる事をどう思われますか？
			郡山	憲法９条を守ったほうが良いと思いますか？変えた方が良いと思いますか？

№	性	年	講師名	質　問　要　旨
23	男	60	記入なし	自衛隊のイラク復興支援活動は、憲法に抵触するのではないか？
				自衛隊は手足であって頭脳ではないと言っているが、自分たちの活動に矛盾を感じることはないか？
				イラクへ派遣されての活動は、イラクに対する国内干渉ではないだろうか？
24	女	59	郡山	戦争を決してしてはいけないということが益々分かりました。人間の力、限界（思考・傾向など）を感じます。暴力でなく、愛でしか救いはないですね。
			松村	自分たちが攻撃（賛同）した後、復興支援とは？真心支援と言えるのでしょうか。この現状になる前に、もっと行動、決定を考えて欲しいと願っています。
			きくち	人間１人の指導者の愚かさ、恐さを改めて感じました。私達は、全角度から物事・将来を見据える力がないことを知るべきですね。世界中の人々が信頼し、助け合うことを行動で示すことが大切なのでは？
25	男	73	郡山 きくち	多国籍軍は、イラクの民主化に役立っているか？自衛隊は、イラク人が必要な事をしているのか？費用対効果から見て、私達の税金をイラクにつぎ込む意味をどのように考えているか。
26	女	59	郡山	あなた自身が見つけた平和の意味を知りたいです。「うちの子がなぜこんな目にあうのか？」と言うイラクの親に何と答えを出しますか？
			松村	自衛隊は「手足」と言い切りましたが、心に反しても命令を割り切れますか？イラクが戦争真っ最中という中、アメリカ側に加担する事に何の疑問も感じませんか？
			きくち	支援すべき国、事柄は多いと思いますが、選ぶ基準はどこに置いてありますか？何をしている時に平和を感じますか？
27	男	62	松村	支援隊の活動範囲が富裕層が住んでいる地域であったと思うが、貧困層の地域であったら、支援隊の活動はどうなっていたのか？
28	男	72	きくち	米軍のイラク侵攻の目的は、①石油②イスラエルを守ること③アメリカの軍需産業を助けることであると思う。あなたの意見を聞かせてください。

№	性	年	講師名	質　問　要　旨
29	男	66	松村	失敗談をお聞きしたい。また、イラク人からの反感、抵抗はなかったのか？
30	男	25	きくち	自衛隊イラク派遣の根拠となったイラク特別措置法とは、どういう法律か教えてください。
			松村	12月に、自衛隊滞在の期限が来ます。滞在延長か撤退かの基準は何ですか？今、イラクに隊員は何人いますか？
31	女	70	松村	何故、サマワでの援助活動をしなければならないのか、戦争を起こさない国々でなければならないと実感されることはありませんでしたか？
32	男	80	松村	・隊員の編成が志願形態であるのか、自衛隊と軍隊との命令に関わる今後の日本自衛の存在について聞きたい。 ・日本国内として出来ない訓練のための演習を、いつも思わずにはいられない。この点どうですか？ ・家族の関係を指揮者はどう考えるか？イラクで学んだ各国との異はどこにあったのか。
33	男	60	郡山	イラク空爆直後から、米軍は石油精油所等を掌握したのか？今に至るまでそうなのではないか？イラク人の意思は汲んでいるのか？
34	女	57	松村	・イラク市民にとって、自衛隊は軍隊だと思う。子供も含め、たくさんの罪がない人達が殺されている中、日本人を見る目が変わっていると聞くが、隊員の人はどう考えているのか？ ・１年前に比べ、自衛隊駐留を直接批判する市民が増えていると聞くが、本当に人道支援といえるのか？ ・サマワで、親日友好協会の人の店が爆破されたりすることは、イラク市民が自衛隊を拒否しているのではないか？ ・サマワの人が「自衛隊は何をやっているのか」と聞き、自衛隊員は「サマワの町は今どうなっているのか」とジャーナリストに聞くという事をどう思うか？ ・イラク派遣は自衛隊の力を試すもので、これから世界各地へアメリカと一緒に出ていく足がかりとなりはしないか？ ・友好的なボランティアの活動を、自衛隊は邪魔していないか？
35	女	55	松村	憲法９条をどの様に実現していくかが日本の課題であって、変える事ではないと思います。どうお考えになりますか？

№	性	年	講師名	質　問　要　旨
36	男	65	松村	サマワに派遣された自衛官の身に付けている放射線カウンターは、劣化ウラン弾の放射線カウントをしない事をご存知ですか？自衛官を欺いている事になりませんか？
37	男	24	松村	日本は、世界において何を示すことができるでしょうか？
38	男	68	松村	この様な報告フィルムが、一般のＴＶやメディアに取り上げられないのは、何故だと思いますか？
			郡山	ゴミ捨て場で生活している人々に、援助は全くないのでしょうか？あるなら、その実態を教えてください。
40	女	62	市長	日本が６０年間平和であったことは、憲法９条があったからだと思いますか？安保条約があったからだと思いますか？
41	男		郡山 松村 きくち	パウエルさんは大量破壊兵器のことで反省しているが、小泉さんはしていない。どう思いますか？

質問に対するコメント

イラクで拘束されたフォトジャーナリスト　郡山　総一郎

・沖縄とパレスチナが重なったという内容

沖縄は「米軍基地の中の沖縄」だと感じるからです。一等地の真ん中に大きな基地があり、それを避けるようにして道路が走るっている。まさに「占領」されているといっても過言ではないのでは？と思ったので。

・子どもがイスラエル兵士に向かって石を投げる。この子達の親は何をしていたのでしょうか？

彼らの中には親、兄弟を兵士に殺された子もいます。そしてこの子らの親も投石をしてきました。パレスチナ人達は約 60 年間占領されているのです。そして投石する事が彼ら世界にアピールする方法なのです。こんな事をしないと誰も関心を持ってくれないのです。石は彼らの「声」そのものなのです。

・米軍のイラク空爆直後から石油精製所を掌握したのか？

少々意味がわかりかねます。米軍はクエートから進行しましたが、真っ先に行ったのが精製所の火災を消化する事でした。石油相などの建物も公開されず、閉鎖されました。見られたくないのでしょう。この事だけでも明らかに「石油」が目的なのでは？と思われます。

・フォトジャーナリストとして「どうやって人は生きているのか？」の答えは見つかったか？

あなたが求めている「平和」の意味。まだまだ答えは見つかりません。しかし、はっきり言える事は人間は愚かで地球上でもっとも必要ない生き物だという事です。僕の求めている平和は「どんな人間も人間らしく生きる事ができる世界」です。今の世界は「機会不平等」すぎます。

・ゴミ捨て場で生活していた人々に援助はしてないのでしょうか？

「援助」されています。ただ「誰のための援助」かわからない援助です。ゴミ捨て場は来年閉鎖されます。海外の援助によって焼却炉が設置されるからです。ちなみにこの焼却炉は日本製で日本では到底規格が通らないほどの有毒ガスを発生させるそうです。そしてゴミ捨て場で生きている人々はここでしか生きられません。なのにその生活の場を「支援」によって奪われるのです。誰のための支援でいったい誰が救われるのでしょう。支援によって起こされる「人災」なんです。

・戦争について知る事は第１歩だと思う。一般市民として第２歩目はなにか？

僕は「役割分担」だと思います。僕ができて皆さんにできない事があるように、僕にできなくて皆さんにできる事が必ずあるはずです。何をしろとは言えません。ただ、このままの世界の流れでは皆さんも「犠牲者」になる可能性があるという事です。できる事からでいいと思います。しかし、何をしたら？という問いには大変心強く感じます。僕はこれからも自分の役割として写真を撮り続けます。

・戦争をなぜ？世界は止める事ができないのか？

僕は「他の国で起きている出来事」としてしか受け取れない個人の「想像力」の欠如だと感じます。自分たちが「犠牲者」となって初めて気が付くのでしょう。しかし、日本人にも１歩１歩犠牲者に近づいているんですけどね。僕は諦めたくないのでこれからもできる事をやっていきます。

・今憲法９条が改憲される動きに拍車がかかっています。それを肯定する政治家や国民

がいるという事をどう思うか？

肯定する側の人々はまさに「戦争」を知らないし想像すらした事がないのでしょう。歴史的に見ても起こす側の権力者が戦争によって犠牲になった事はあまりありません。多分自分の事しか考えられないのでしょう。そんな人々に戦争の現場を見てもらいたいと思います。強引に引っ張って連れていって銃弾が当たるとどれくらい痛いのか？　どの様に人が殺されるのか？　人間が殺され腐敗していく「匂い」を経験してもらいたいと心から思います。僕は９条は絶対に守る「護憲」です。

・自衛隊や日本はイラクにとって必要な事をしているのか？

イラク人が必要としているものそれは「雇用」「仕事」です。治安の悪化の理由の１つに生活していけないという事があります。迷彩服身にまとい銃を持った日本人ではなく彼らは「企業」や「NGO」を求めているのです。軍隊がいるだけでそのどちらも難しくなっているのが現状です。

我孫子市民の皆様へ

陸上自衛隊　一等陸佐　松村　五郎

我孫子市の皆様、「戦争と平和講演会」でお話をする機会を与えていただき、誠にありがとうございました。私とは立場のまったく異なる方の話も聞くことができ、私自身、本当に勉強になりました。ただ一つ残念だったのは、市民の皆さんと直接お話することができなかったことです。再び機会がありましたら、是非ゆっくりとお話したいと思っております。

さて、皆様から書面でいただいたご質問についてですが、「自衛隊がイラクの人々のために人道的な復興支援活動を行って現地で感謝されているということはわかったが、何故、あえて武器を持った自衛隊がそれを行わなくてはならないのか？」というご質問が一番多かったようです。確かに、イラク以外の世界各地では、日本政府による政府開発援助やＮＧＯ等の日本人ボランティアの方々の活動によって、有効な支援が行われています。しかしイラクにおいては、フセイン政権崩壊後、イラク国内各勢力の対立と相俟って、外国からのテロリストの流入もあり、残念ながら、公務員、ボランティアいずれにせよ、日本人が現地で活動するには、余りにも危険な治安状況が続いています。そのような中でも、わが国として何とかイラク復興に貢献したいということで、日本政府

は自衛隊をイラクに派遣するという決断をしたのです。武器を持った自衛隊であるからこそ、テロリスト等から安易に狙われることなく、継続的な活動ができるのです。自衛隊は、決して武器を使うためにイラクに行っているのではなく、武器を持つことによってテロリスト等の攻撃を未然に防止して、イラクの人たちのために人道復興支援活動を続けているのです。

もちろん、イラクの人々にとって、テロリストがいない平和で安定した社会が早く達成されることが一番です。その暁には、日本からもボランティアや民間企業の方々が、どんどんイラクに入って行って、今自衛隊が行っているよりも何倍、何十倍もの復興支援ができるようになるでしょう。イラクに、そのような日が一日も早く訪れることを、心から願っています。

みなさんからの質問を読んで…

グローバルピースキャンペーン、『戦争中毒』翻訳者　きくち　ゆみ

昨年の10月に行われた講演会で私の話しを聞いてくださった方に、ちょっとうれしいお話があります。あのとき私は2001年にアメリカで起こった911事件（同時多発テロ事件）について、米国政府の関与、あるいは米国政府の自作自演である可能性がある、と話しました。日本ではそういう報道がほとんどありませんので、私の話を聞いただけでは十分理解できなかった方も多いでしょう。

この原稿を書いている3月22日、アメリカのCNNが人気番組の「showbiz」で「911事件の政府発表には疑問がある。政府は真相を隠蔽しているのではないか」というチャーリー・シーンのインタビューを取り上げ、それが大論争に発展しました。

視聴者の反応に押されたのか、翌日にも続けて、911事件の真相を追っている独立系ジャーナリストのアレックス・ジョーンズが生放送で同じ番組に出演しました。アメリカの大手メディアがこの問題をまともに取り上げたのはこれが初めてです。

ことの発端は、ハリウッド大スターのチャーリー・シーンがアレックス・ジョーンズにコンタクトしたことから始まります。アメリカのメディアが怖がって言わないことを、アレックスは911事件の直後から自分のラジオやテレビ番組で語ってきました。彼は命を脅迫されていてもひるむこと無く、米国政府の自作自演を確信しており、公言するこ

とをやめません。その彼の説に賛同するとチャーリー・シーンが言ってきたわけで、アレックスはチャーリーをさっそく自分の番組でインタビューしました。

そのインタビューに眼をつけたのが、showbiz のホストの A.J.ハマー。ハリウッドの大スターの発言だということで、「これはおもしろい」と取り上げたわけです。おそらくそれがこんなに大論争になるとは思ってもみなかったでしょう。番組後、CNN へのメールや電話が殺到し、世論調査でもチャーリーの「爆弾発言」への賛成が８割を超えています。このことが 911 事件のアメリカにおける真相究明につながること、そして「対テロ戦争」という根拠のない戦争に終止符が打たれることを祈ります。

あの講演会では自衛隊の松村さんが「自衛隊は手足であって、頭は日本政府、それを選んでいるのはみなさんです」ということをおっしゃりました。これはまったく重要な指摘です。私たちが選挙で選んだ国会議員が日本の外交や安全保障政策を決めているわけですが、みなさんは果たして自衛隊がイラクにいくことを望んでいたでしょうか。確か世論調査では、７割か８割近くの方が反対だったのではないでしょうか。しかしその同じ日本人の大半が選挙になると、現政権を支持している訳です。投票行動を変えなくては、憲法が変えられ、戦争できる国になってしまうでしょう。

イラク戦争が始まって早３年。今日もイラクで罪のないイラク市民が殺されています。自衛隊員は今もイラクにいます。たまたま私は先日、米国から来日中の低線量被曝の専門家のスタングラス博士とローレン・モレさんの通訳をしたのですが、自衛隊が駐留しているサマーワは劣化ウラン汚染がひどいそうです。イラクから帰国した自衛隊員がすでに５人も自殺していることがつい最近報じられていましたが、病気との関連ではないかと心配です。仮にイラクから帰国した自衛隊員が被曝したり、その子どもに先天性異常があったとしても、日本ではおそらく報道されないでしょうから。

劣化ウランの主成分はウラン 238 ですが、2003 年３月の衝撃と畏怖作戦の９日後には英国上空で大気中のウラン238がこれまでの値を遥かに越える数値を記録しています。同様のことが 2001 年 10 月のアフガニスタンを攻撃した直後にも起きています。このデータは AWE という英国政府機関（現在はハリバートン所有）のものですから、信頼に値するでしょう。

大気の移動は英国で止まることはありませんから、ウラン 238 の微粒子は今や全世界に拡散していることになります。当然、日本にもきているはずです。これが話題になら

ないのは、日本にはそういうデータがないか（原子力発電所を55基も稼働させているので、放射能の観測は常時しているはず）、データが隠されているかのどちらかでしょう。

政府が戦争をしようとするとき、あるいは戦争をするとき、政府にとって都合の悪い情報は流れなくなります。今や日本も「対テロ戦争」に参戦していると私たちは認識したほうがいいでしょう。しかしながら、街でインタビューしたら、日本が参戦中と考えている人はまずいないと思います。実際は米軍に協力しているのですから、立派に参戦しているのです。

だから911事件にしても劣化ウランの汚染にしても、肝心のことはメディアに取り上げられないでしょう。今、毎日テレビを騒がせている永田議員の偽メール問題よりも、「イラクに大量破壊兵器がある」という米国のガセネタ（結局、大量破壊兵器はなかった）を鵜呑みにして、我が国を守るための自衛隊をイラクに送ってしまった小泉首相のほうが、よっぽど問題です。

すでにイラクでは少なくとも6人の日本人が殺されているし、もどってきた自衛隊員も自殺しているのです。永田議員のことはせいぜい金の問題で、いのちは奪っていません。小泉さんの間違った決断は違法な侵略戦争と占領への加担であり、毎日無実のイラク市民（多くが女性やこどもたち）が殺されているのです。

私の判断基準は極めてシンプルです。もしそれが自分自身に起きたら（たとえば爆弾で殺されたり、劣化ウランで被曝してガンや白血病になるのが自分や自分のこどもだったら）どうか、と考え、行動を決めます。いのちを損なうものは止めようとするし、いのちを育むものは応援します。私の吸う空気に放射能をばらまかれるのが嫌なら、劣化ウラン兵器の製造や使用を止めるよう行動しますし、こどもを殺されたくなければ、戦争に反対します。

私自身は団体に所属しているわけでも、何かの後ろ盾があるわけでもありません。ただ一人のおかあさんとして、子どものいのちを守りたい。そのために自分のできることは何でもします。得意なこと（私の場合は、書いたり、話したり、翻訳や通訳、イベントプランニングなど）を続けるのなら、疲れることもありません。

もちろん、政府の方針と逆のことを言ったり、やっているわけですから、いろいろな嫌がらせはあります。それでも私が元気に続けていられるのは、自分を含めたすべてのいのちの側に立っているからだと思います。いつも大自然からの応援を感じています。

講演会では私の日々の暮らしぶりについてはあまり話すことができませんでしたが、我が家ではお米と野菜を完全無農薬でほぼ自給しています。そして家族の誰かが体調を崩したときも、周囲の野草や食べ物で治してしまいます。大自然は私たちが健康に生きていくのに必要な全てのものを無償で与えてくれています。地球はもともと愛で溢れているのです。それを知っていますし、いつも支えてもらっていますので、元気いっぱいなのです。

これからも大切なことをメルマガ「きくちゆみの地球平和ニュース」やブログを通じて伝えていきます。関心のある方は、以下のサイトをご参照くだされば幸いです。

きくちゆみのブログ　http://kikuchiyumi.blogspot.com
911 ボーイングを探せ　http://www.wa3w.com/911
テロリストは誰?　http://www.wa3w.com
グローバル・ピース・キャンペーン　http://globalpeace.jp
Harmonics　Life センター　http://harmonicslife.net
Global　Peace　Campaign(English)　http://english.globalpeace.jp
Yumi's　English　Blog　http://yumikikuchi.blogspot.com

最後に、この講演会を企画していただいた我孫子市の職員と忙しい中、講演会に来ていただいた平和を愛する我孫子市民のみなさまに感謝します。憲法９条を守るだけでなく、実現できるよう、「日本に平和省をつくろう」と動き出しました。こちらはグローバルピースキャンペーンの HP の最新情報をご覧ください。http://globalpeace.jp

「戦争と平和」講演会を終えて

我孫子市長　福嶋　浩彦

私たちは平和について考える時、まず世界の現実を「知る」ことから始める必要があります。今回はイラクで、私たちと同じ市民がどんな状況に置かれているのか、先入観やイデオロギーはいったん横に置いて、自分自身の耳で聞き、目で見て考えてみたいと思いま

した。そこで、イラクの現地の様子に詳しい、しかし立場のまったく違う３人の方をお呼びして講演会を開催しました。

参加された市民の皆さんも、それぞれ意見をお持ちだと思いますが、同じ意見の人たちで集まって行動するだけでなく、自分と異なる立場の人の考えもじっくり聞いてみる、お互いにそんな姿勢を持つことが「平和の原点」ではないでしょうか。憎しみと報復の連鎖を断ち切り、新たな暴力と犠牲者を生まないための唯一の方法だと思います。

もちろんすぐに噛み合った議論にならないところも多いのですが、３人の講師の方それぞれから「普段は対話する機会の少ない立場の人と話せたのは本当に貴重なことだった」という感想をいただきました。参加者アンケートでも、「異なる立場の人の話を同時に聞けて良かった」「平和は違う立場の人が議論して、はじめて一歩前進する」などの意見が多く寄せられ、この企画をやって良かったと実感しています。

また、私に対しては「この60年間の平和は、憲法９条のおかげか、安保条約のおかげか」という質問をいただきました。憲法９条の果たした役割はもちろん大きかったし、これからも大切にしていきたいと思います。ただ、一つだけの要因で平和が維持されたとは思えません。冷戦構造の下での力の均衡、政府の政策、国民の世論や平和運動、全てが合わさった結果だと言えるでしょう。ですから、危うい平和の維持だったかもしれません。

この平和をより確かなものにし、真の平和を生み出していくために、冷静に物事を見つめつつ、情熱を持って行動していきたいと思います。